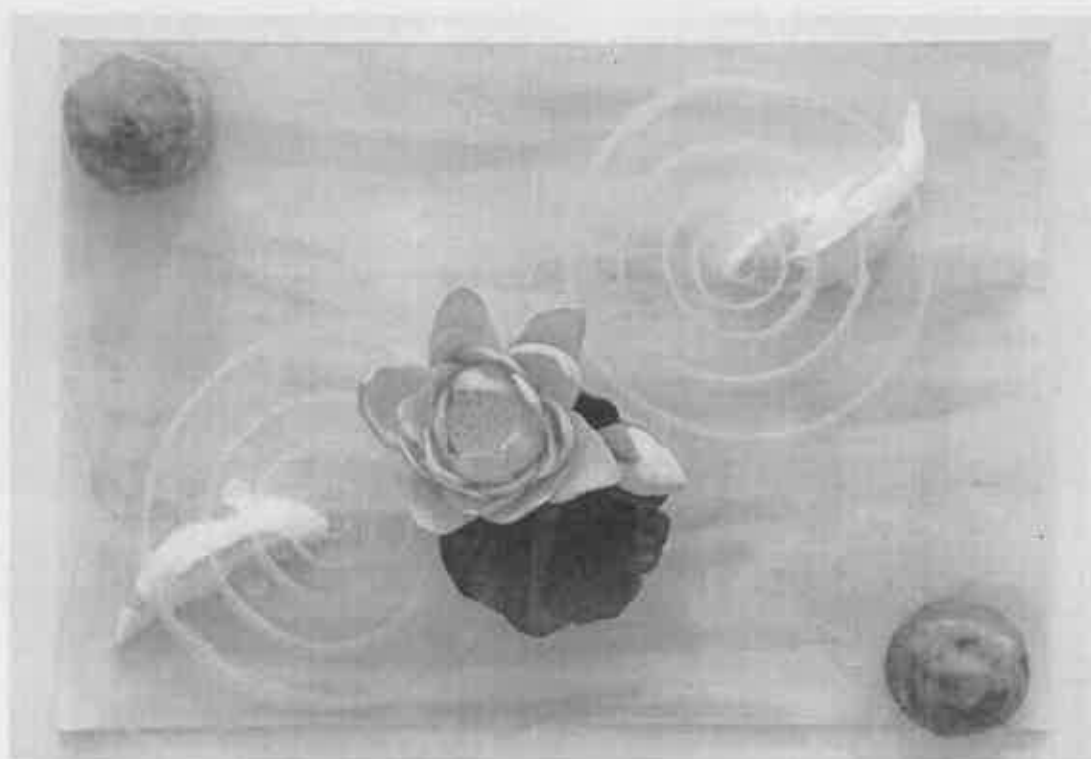


平成 26 年度
研 究 集 録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究



川 越 市 教 育 委 員 会

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」
～体験的な活動をとおり、思考力・表現力を伸ばす理科・生活科指導の工夫～

川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- 昨年度の研究の課題（「生命・地球」の内容の知識理解の定着が不十分）から、自然と直接関わる体験的な活動を通して、実感を伴った理解を図るとともに、自然に対する見方や科学的な思考力・表現力を伸ばし、主体的に問題解決しようとする児童の育成を図る。
- 生活科の学習において、2年間を見通した指導が図られるように年間指導計画の見直しを行い、児童が自分の思いを十分に表現できるような学習を展開していく。
- 児童の実態を的確に把握するために調査・分析し、学んだことを実感し、生活の中に生かそうとする児童の育成を図る。
- 環境整備を行い、理科・生活科の学習と実生活を結び付け、生命や環境を大切にしようとする児童の育成を図る。

1. 研究の概要

(1) 研究のねらい

昨今、小学校理科教育において、児童の理科離れや科学的な思考力の低下という問題が指摘されている。本校においては、理科に関する各種調査の結果から、各学年ともに理科の成績が他教科の成績を下回っているという現状がある。理科好きな児童が多い反面、基礎・基本の定着や科学的な思考力が十分に身につけているとは言えない。また、校区が市街地にあり、日常生活での自然に関する生活体験は全体的に乏しいという実態がある。

このような実態を踏まえて、児童が主体的に学べるような体験的な学習を行い、実感を伴った理解を促しながら科学的な思考力や表現力を育てるための指導法の工夫改善を図っていくことにした。

(2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標「四つのだいじ」（いのちをだいじに、人をだいじに、心をだいじに、ものをだいじに）の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「体験的な活動をとおり、思考力・表現力を伸ばす理科・生活科指導の工夫」とした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(2) 研究仮説

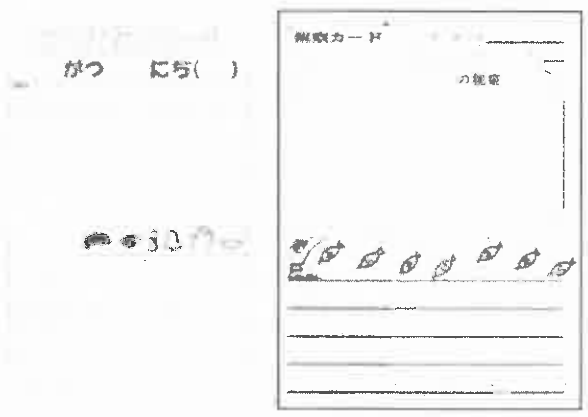
- ① 五感を豊かに働かせる具体的な活動や体験を多く取り入れ、問題解決的な学習や自然の不思議さ・面白さを実感する活動を展開すれば、新しい発見や出会いに感動し、自然の事象に主体的に働きかける児童が育成できるであろう。
- ② 児童の実態を把握し、一人一人が自然と関わる学習活動を展開すれば、自然に親しみ、自然を愛し、生命や環境を大切にしようとする心豊かな児童が育成できるであろう。
- ③ 理科・生活科の学習と実生活を結び付けた授業を展開し、表現活動や意見交換をする場を工夫すれば、自然に対する見方や科学的な思考力を深め、自然の性質や規則性を生活の中で実感し、生かそうとする児童が育成できるであろう。

3 実践事例

(1) 授業研究部

- ① 論理的に思考し、自分の考えを表現するための手立てとして予想や考察などの定型文を示した。
- ② 学校全体で共通して使用できるように観察の視点を入れた生活科と理科の観察カードを作成した。

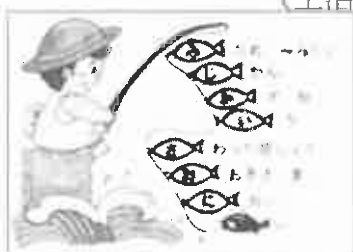
予想や考察の書き方～小バージョン～	
予想	・○○だと思う。／○○だろう。 ○げなう。○○だから。
解決方法	そのために、○○をすれば確かめられると思う。
結果	・思、表、グラフなど ・○○は、 ○○となった。／○○という結果になった。
考察 わかったこと	・○○(観察・実験したこと)したら、 ○○という結果になった。／○○だった。 この結果から、 ○○ということが考えられる。 ○○ということがわかる。(より断定できる)
深める	・身の回りでは、○○とどている。 ○○と同じだ。



- ③ 表現する場を設定し、一人一人に司会や発表などの役割をもたせ、基本となる話形を示して全員が安心して発表できるようにした。

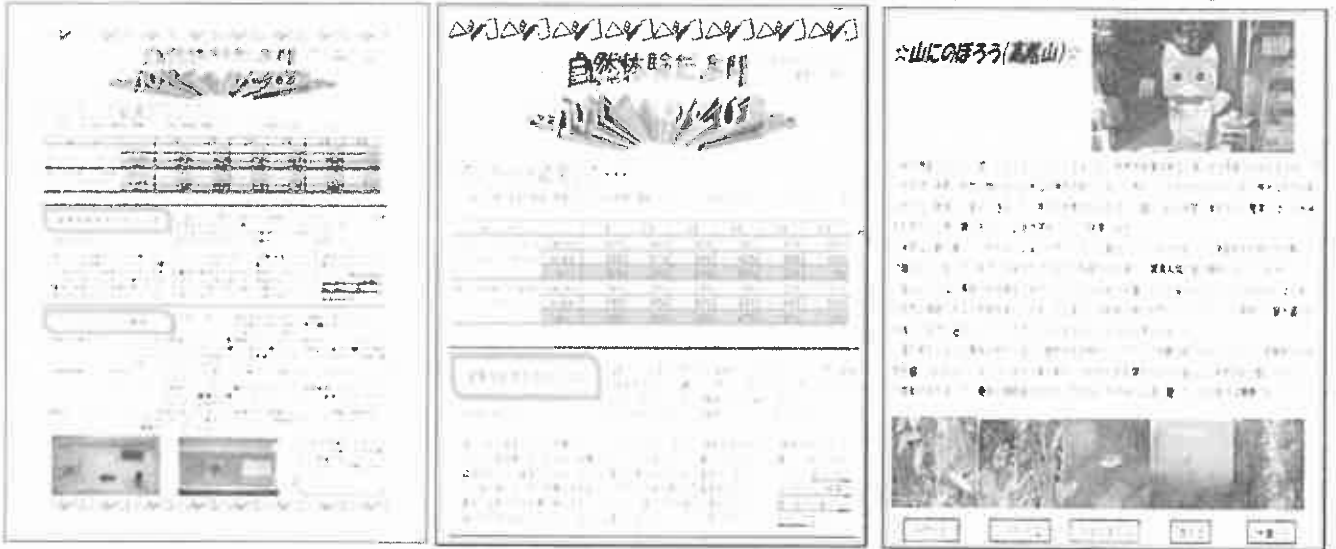


- ④ 観察・実験・考察における視点を明確にした。(理科：みじかいさおに)
(生活科：かんさつくん)
- ⑤ 作成した教材は学年や单元ごとに整理して保管し、共有できるようにした。



(2) 調査部

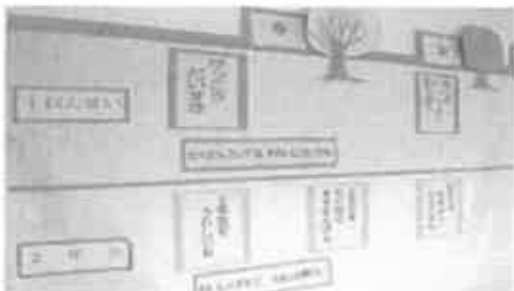
- ① 理科・生活科の興味関心や自然体験の有無についてのアンケートを行った。また、その調査結果を分析し、どうすれば児童一人一人が、進んで自然に親しむようになるか考察し、課題を明確にして進めた。
- ② 自然体験は家庭の協力が必要なものも多いことや自然体験の不足が顕著であるという結果から、「自然体験だより」を発行し、保護者への啓発を図った。



(3) 環境部

- ① 児童にとって学習が進めやすくなるよう、以下の環境整備を行った。

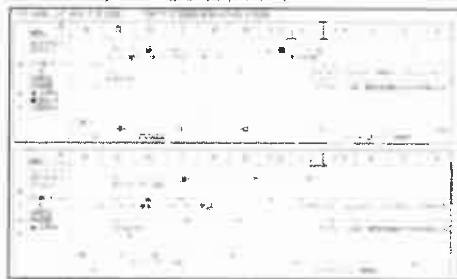
ア 学習内容系統表



イ 生活科室・生活科準備室マップ



ウ 栽培計画



エ 板書カード



- ② 理科や生活科に興味をもてるようなコーナーを設置し教材との関連を図った。

ア 3～6年理科コーナー



イ 科学体験・生活コーナー



ウ 科学のとびらコーナー



- ③ 「川越第一小グリーン検定」を行い、校内の自然を見たり、触れたりしながら、検定の様々な問題に取り組んだ。合格者には合格認定書（グリーンシール）を授与した。

ア グリーン検定用紙

イ 児童の取組



- (4) 地域教育施設との連携・地域人材の活用・家庭へ啓発

- ① 県立川越高校での子ども科学体験・科学展相談助言会
- ② 県立川越高校教員との研修交流会
- ③ 川越市小・中・大学連携理科ふれあい事業
- ④ 一人一鉢運動
- ⑤ 地域人材による授業への支援



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 体験の時間を増やし、さまざまな材料を用いて遊んだことから、主体的な活動が生まれ、気付きを高めることができた。
- ② 事象提示や活動の工夫で、意欲的な問題解決が行われた。
- ③ 定型文の活用や話し合い活動の工夫で、思考力・表現力を伸ばすことができた。
- ④ 「みじかいさおに」の定着を図り、観察や実験の視点をはっきりさせることができた。
- ⑤ 少人数の実験の場を設定し、児童一人一人が直接自然と関わり、実感を伴った理解に繋がった。
- ⑥ 自然体験日より「かがくへのとびら」を発行したことによって、保護者への啓発を図ることができた。

(2) 課題

- ① 昨年度までの標準学力調査で通過率が低かった箇所や理解が不十分であった単元を更に教材研究していく必要がある。
- ② 実感を伴った理解は児童の思考力を高めることができる。感動、驚き、喜びを実感できる場面を授業の中に入れていくことが重要である。
- ③ 1年を通して長い期間で観察する単元については、指導に変化をもたせる、導入の仕方を工夫する等、興味関心が持続できるようにしていく必要がある。
- ④ 理科に関する体験については、家庭の協力が必要なものも多いので、家庭地域や児童への啓発活動、連携を深めた指導をさらに進めていきたい。

「豊かな心とたくましい体の育成」
～仲間と豊かに学び、高め合う体育科授業を通して～

川越市立月越小学校

研究のポイント

- ・体育科授業を通して、体力向上及び豊かな心の育成を目指した。また、授業だけでなく日常的な取組を通して研究を推進した。
- ・授業の中で、児童相互のかかわり合い、教師と子ども達とのかかわり合いを大切にし、互いに協力し助け合うことのできる子ども、できた喜びを分かち合い友達の喜びを自分のことのように喜べる子どもを育てていきたいと考えた。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

様々な今日的課題の中でも他者を思いやる気持ちや人権尊重の心、正義感や遵法精神、自制心や規範意識、人間関係を形成するコミュニケーション能力などの低下により、子ども達の徳性に係る課題は多い。また、体力については下げ止まりや上向き傾向とも言われるようになってきたが、運動を進んでする児童とそうでない児童の二極化、特定の運動のみ得意であるという運動の専門化、基本的な動きや身体を操作する能力の低下等は依然として課題として挙げられている。

第2期埼玉県教育振興基本計画の基本理念は、「生きる力を育て 絆を深める埼玉教育」であり、基本目標の5つの柱の中の1つに「豊かな心と健やかな体の育成」が設定されている。学校教育目標「自ら学び 明るく 生きぬく子」の具現化を図る本校において、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を目指し、本研究を推進する。

(2) 研究主題設定の理由

「知・徳・体」の中でも健康・体力は、人間が発達・成長し、創造的な活動をするために必要不可欠なものであり「人間力」の重要な要素である。また、体育科は、単に技能や体力を高めることだけを目指しているのではなく、身体活動による人間形成が大きな目的となっており、児童一人一人の自己実現のために欠かせない学習である。

体育科の学習では、運動の特性や魅力を十分味わわせることで、運動に親しみ運動好きな児童を育てていくことが大切であるが、技能が身に付いていない児童には運動の特性や魅力を味わうことは難しい。そこで、基本的な技能が身に付けられるように指導方法を工夫し、できた喜びを児童一人一人に味わわせることが必要である。また、その過程で仲間とのかかわり合いを深めることで、児童に社会性が育まれていくと考える。

本校では、平成23・24年度の2年間、豊かな心の育成を目指し、道徳のみならず教育活動全般を通して研究を推進してきた。その結果、児童は落ち着いた学校生活を送ることができるようになってきた。しかし、その一方で、主体性に欠ける行動や友達とのコミュニケーション不足によるトラブル等、新たな課題が見られるようになってきた。そこで、体育科を通して本校の課題解決を目指し、互いに協力し助け合う活動の中で、できた喜びを分かち合い、友達の喜びを自分のことのように喜べる児童を育てていきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織ならびに全体構想図

学校教育目標

自ら学び 明るく 生きぬく子

- 自ら学び（自主的・主体的に学び考える子）
- 明るく（誰とでも仲よく、思いやりのある子）
- 生きぬく（運動に親しみ、健康でたくましい子）

保護者の願い

- ・友達と仲よくかかわって、学校に楽しく元気に通ってほしい。
- ・基礎的・基本的な学習内容を身に付けてほしい。
- ・いろいろな経験を積んで、持てる力を伸ばしてほしい。

児童の実態

- ・協力して活動することや、節度ある生活を送ることができる。
- ・自己表現能力に係る個人差が顕著であり、コミュニケーション能力を育てる必要がある。
- ・学力面、体力面ともに「得意な子」「苦手な子」の二極化傾向が見られる。また難しいと思える課題にも挑戦する意欲、解決を図るための忍耐力を養う必要がある。

教師の願い

- ・相手の気持ちを考えた言動ができるようになってほしい。
- ・何事にも意欲をもって、前向きに、粘り強く取り組んでほしい。
- ・友達と進んでかかわり、協力して活動してほしい。

研究主題

豊かな心とたくましい体の育成
～仲間と豊かに学び、高め合う体育科授業を通して～

目指す児童像

仲間と進んでかかわり、できた喜びを分かち合える児童

- 低：誰とでも仲よく運動する児童（友達と励まし合って運動すること）
- 中：友達と協力して運動する児童（友達のよさを認め合って運動すること）
- 高：仲間と助け合って運動する児童（仲間と教え合って運動すること）

<研究仮説>

仮説 1

課題解決に向けて、仲間と積極的にかかわり、学び合いのある体育科授業の実践をすれば、豊かな心とたくましい体の育成ができるであろう。

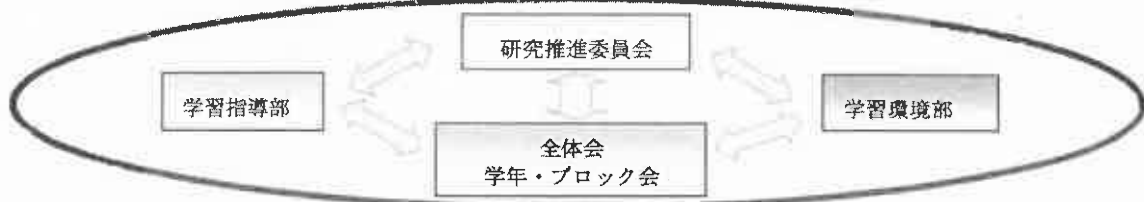
仮説 2

運動の特性や魅力に触れ、指導方法を工夫した高め合いのある体育科授業の実践をすれば、豊かな心とたくましい体の育成ができるであろう。

<手立て>

- ①学習規律の徹底（共通理解）
- ②めあてのたせ方の工夫（共通課題・個人課題）
- ③学習形態の工夫（ペア・グループ学習など）
- ④言語活動の充実（学び合いの充実）
- ⑤学び合いの場面の工夫（学び合いの活性化）
- ⑥まとめの工夫（自己評価・相互評価）

- ①学習内容の明確化（系統性）
- ②技能分析（ポイント・コツ）
- ③指導方法の工夫（教師の言葉がけ）
- ④場の工夫（スモールステップ）
- ⑤まとめの工夫（技能の高まりの分析）
- ⑥指導と評価の一体化（次時への意欲）



2 研究の内容

(1) 学習指導部：授業を支える指導方法の工夫と技能分析等についての研究

① 資料作成の意図

ア 技能の共通事項について

学習指導要領で示されているものを月越小学校の児童の実態に合わせて学習内容を明確にした。各学年で身に付けさせたい技能を明確にし、系統立てて指導できるようにすることで、技能の向上をねらった。

イ 授業の流れについて

1時間の授業の流れを学校全体で統一し、どの学年でも同じ流れで学習を進めていくことで、系統立てて指導できるようにした。また、ペアでの活動・〇〇タイム・今日のMVPなど意図的に友達とかかわる場面を設定した。

(2) 学習環境部：授業を支える児童相互のかかわりについての研究

① 資料作成の意図

ア 体育科授業における約束と指導の共通事項

学習規律の確立を目指し、体育科授業における共通の約束事を見直した。全学年同じ約束事を徹底することで、学年が変わっても児童が見通しをもって学習に取り組めるようにすることをねらいとした。また、その約束事を徹底させるための指導のポイントとして、指導の共通事項も併せて見直した。

イ 学び合いの目標・内容

学年ごとの学び合いの目標や具体的な子ども達の活動の系統性を把握し、見通しをもって指導にあたることを目的として作成した。

ウ 学習カードの評価項目

1時間の中で、学び合いの目標・内容に即した自己評価ができるようすることを目的として作成した。また、評価項目には、「〇〇することができたか」と「〇〇してもらったか」という二つの側面から自己評価を行えるようにした。

エ 今日のMVP

1時間の中で、ねらいに即したまとめができるようにすることを目的として作成した。また、友達の動きに目を向け、励まし合ったり、認め合ったり、教え合ったりすることができたかを交流し合うこともねらいとした。

オ 言葉がけの掲示

友達に声をかける時に、よい言葉の例示となることを目的として作成した。

(3) 学年ブロック会：授業についての話し合いやまとめ

3 実践事例

(1) 授業実践

平成26年7月10日（木）

第2学年2組「ようかいドッジ」（ボールゲーム）体育館 授業者：石井 千穂

指導者：川越市立月越小学校長 大久根 正先生

平成26年10月28日(火)

第1学年1組「ボールゲーム」(ゲーム)運動場 授業者:原 香織

指導者:川越市文化スポーツ部スポーツ振興課指導主事 白根 彰人先生

第3学年1組「小型ハードル走」(走の運動)運動場 授業者:大崎 雄太

指導者:川越市教育委員会学校教育部教育センター主幹 嶋下 正彦先生

第5学年1組「跳び箱運動」(器械運動)体育館 授業者:大野 拓也

指導者:川越市教育委員会学校教育部教育指導課主査 谷口 泰夫先生

特別支援学級「ボールゲーム」(ゲーム)運動場 授業者:山崎 佐織・牛村 弥生

指導者:川越市立高階北小学校長 浅見 由利子先生

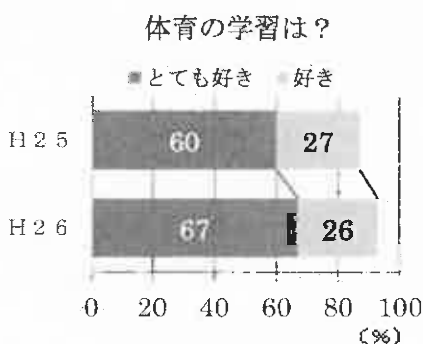
(2) 日常的な活動

- ・児童(運動委員)による投げ方教室
- ・わんぱくタイム(全校マラソンタイム)
- ・縦割り班活動(全校遠足・なかよし清掃・なかよし給食)
- ・あいさつ運動

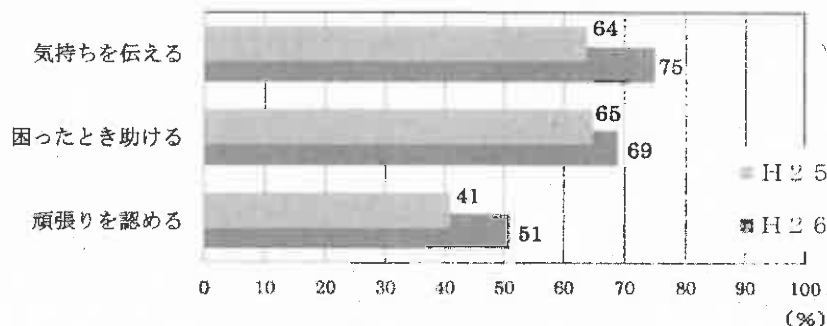
4 研究の成果と課題

成果

- ・学び合いの目標・内容や技能指導について学校としての共通事項を明確に定めたことで、系統性を踏まえた指導が展開できた。
- ・学習の流れや指導上の共通事項などを学校全体で共通理解したことで、日常の授業にも反映され、教師の授業力の向上を図ることができた。
- ・研究授業を通して、児童相互のかかわらせ方や技能向上のための手立てに係る検証ができた。
- ・児童の実態を見つめ直したことで、実態に応じた有効な手立てや教材教具を工夫することができた。
- ・アンケート調査の結果、授業の中で意図的に友達とかかわらせる場面を設定したことで、仲間と一緒に活動できることに体育科のよさを感じている児童が増えた。
- ・学校生活全般において、友達を思いやる態度や言葉がけが増えてきた。



友達と仲よくするには? (上位3項目) 複数回答



課題

- ・身に付けさせたい技能に対する手立てをより明確にし、日常の授業でも実践していく必要がある。
- ・豊かな心の高まりの評価をより明確にし、指導と評価の一体化を図る必要がある。
- ・体育科で育んだ心を他の教科や領域等、学校生活全般に生かしていくための手立ての工夫が必要である。

「たくましい体と豊かな心をもつ、南古谷っ子の育成」 ～学習意欲を高め、運動の楽しさを味わう体育科指導の工夫～

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- 知・徳・体の調和がとれた、進んで運動を楽しむ児童を育成する。
- 新しい発見をさせる授業・力を伸ばす授業を通して「わかる楽しさ」「伸びる楽しさ」を味わえる授業を実践する。
- 児童数・学級数の増加にともなう運動場所の不足と遊びのマナー化等の課題に対し、「動く楽しさ」「集う楽しさ」を味わえる多様な運動遊びを提供し身体を動かすことへの意欲向上を図る。
- 望ましい生活習慣を身につけ健やかな成長ができる児童を育成するため、規則正しい生活についての調査・検討や資料の整備・充実を図り実践する。
- 体育科授業、運動の生活化、環境の整備、保健調査の面から研究主題に迫る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 「わかる楽しさ」「伸びる楽しさ」を味わえる授業実践を通して、コツコツと体をきたえる子の育成を図る。
 - ア 活動欲求を満たす。
 - イ 児童の基礎・基本の習得を保証する。
 - ウ 運動技能の伸びを実感する。
 - エ 自己の技能に応じた技や練習の場を選択できる授業を実践する。
- ② 授業や休み時間で友だちと一緒に活動したり、自分なりのめあてをもって友だちと競い合ったりする中で運動の楽しさを共有・共感できる児童を育成する。
- ③ 生活習慣を改善し、健康な体づくりに取り組む児童を育成する。

(2) 研究主題設定の理由

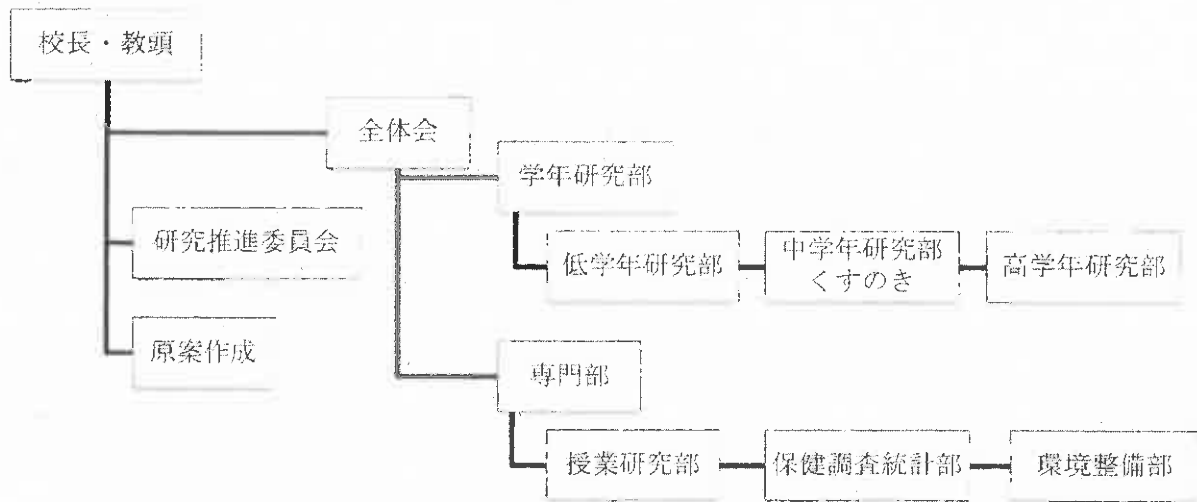
本校では、児童数の急激な増加に伴い、狭い運動場にひしめき合いながら休み時間を過ごしたり、体育の学習に取り組んだりしているため、運動に関する環境は決して恵まれているとはいえない。

また、子どもたちの生活習慣を見ても睡眠時間が短く、起床時間が遅い、朝食等の欠食が見られる児童もいる。そのため、ストレスや不安、よりよい学習習慣、運動習慣が身につけにくい状況にあり、望ましい生活習慣が必要である。

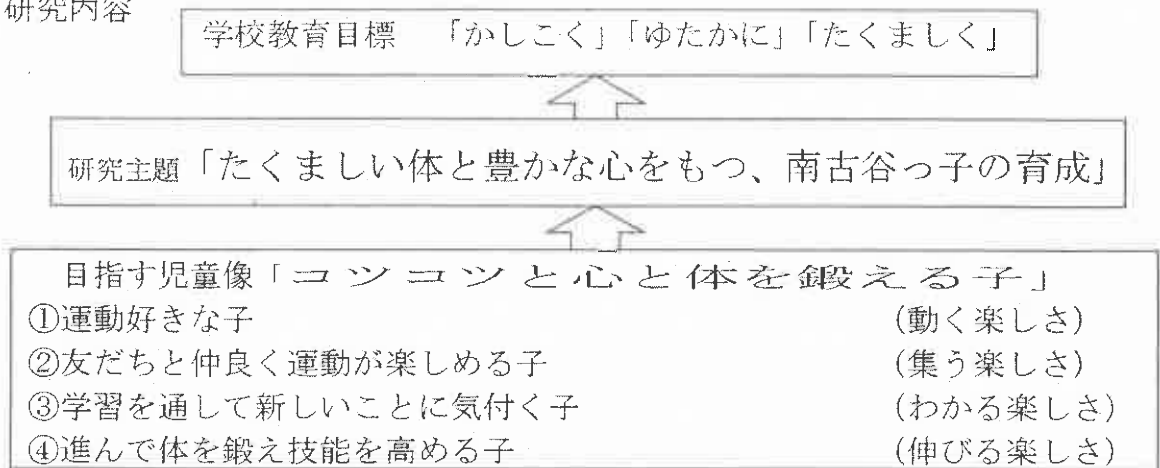
新体力テストにおいても、研究を始めた24年度には男子が全48項目中19項目、女子では15項目しか県の平均を上回れず、また、体力ランクについても男子はAランクが11.6%、Bランクが30.9%、女子はAランクが13.3%、Bランクが28.2%と、県が掲げる目標値80%にはほど遠い。そして、特定の運動技能は高いが器械運動やボール運動は苦手等の運動の偏りも見られる状況であった。

こうした課題を解決すべく本校では、本研究主題を設定し2年間の研究に取り組んでいる。

(3) 研究組織



2 研究内容



<p>仮説 1</p> <p>『児童一人一人にめあてを明確にもたせれば、主体的に運動に取り組むことができるであろう』</p>	<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習規律の徹底 (運動量の確保) ② めあてのもたせ方の工夫 (モチベーションの工夫・掲示物) ③ 学習内容の明確化 (系統性・技能分析) ④ 指導方法の工夫 (場の工夫・教材教具) ⑤ まとめの工夫 (技能の高まり)
<p>仮説 2</p> <p>『ねらいに迫るために、学習の場作りや用具の使い方を工夫すれば、指導内容の定着や技能の向上が図れるであろう』</p>	<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 技能の分析 (ポイント・コツ) ② 場の工夫 (スモールステップ) ③ 慣れの運動の工夫 (主運動につなげる工夫) ④ 小道具の活用 (授業効率・技能向上) ⑤ 教師の関わり (言葉かけ・称賛・補助)
<p>仮説 3</p> <p>『学習カードを工夫し、ねらいに即した評価をすれば、教え合い、高め合うことができるであろう』</p>	<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 言語活動の充実 (学び合いの充実) ② まとめの工夫 (短時間で、自他評価) ③ 学習形態の工夫 (ペア・グループ) ④ 学び合いの場面の工夫 (等質グループ・異質グループ) ⑤ 学習カードの工夫 (記述・選択・課題・内容・方法)

3 実践事例

(1) 授業研究部の取組

① 年間指導計画の修正・運動場や体育館の使用割り振り

児童1人あたりの面積が狭い本校で、効果的に体育授業を進めていくために、年間指導計画の修正や体育館・運動場の使用割り振りに取り組んだ。

② 研究仮説に対する手立てや方策

ア 「めあてのめあて」の手立てとして、単元の始めや授業の導入で、掲示物を用いて、単元のねらいと本時における個々のめあてを確認した。



イ 「場の工夫」「小道具の活用」では、ねらいにせまる動きを意識させるため、比較的習得が易しい技から段階的に学ぶことを基本に考え、スモールステップで練習に取り組むようにした。低学年の「ボール投げ遊び」では、児童が苦手意識を持たず楽しく取り組めるような大きい的やキャラクターの絵が描いてあるものを用意した。

ウ 「学び合いの場面の工夫」「学習カードの工夫」として、児童がお互いに励まし合い、アドバイスをしあえるように「アドバイスヒントカード」を作成した。また、授業の評価計画に従い毎時間重点観点を分かりやすく表記した学習カードを活用した。

③ 系統図の作成

児童が自己の技能に応じた技や練習の段階を理解し、その練習の仕方(練習の場)を自分で選べるようにするため、器械運動の系統図を作成した。

(2) 環境整備部の取組

① 遊びブックの作成と活用

限られた運動場のスペースを有効に活用し、「集う楽しさ」を味わえるよう「遊びブック」を作成した。知っているだろうと考えていた「ばんざい相撲」といった遊びも児童にとっては新鮮に感じたようで、率先して外遊びに取り組む児童が増加した。また、担任も遊びに参加して学級全体で色々な運動遊びが展開できるようになった。



② チャレンジギネス記録会の設定

多様な運動に挑戦させるため「チャレンジギネス」を実施した。これは、あらかじめ教師が決めておいた種目(鉄棒や登り棒など)に全校児童に呼びかけて取り組ませ、その記録を競うものである。月に4回、業間休みと昼休みに記録会を行い、結果を体育掲示板や学年掲示板で紹介した。



③ 主体的に運動できる環境づくり

「マラソンカード」を配布し休み時間等も取り組ませ、学期に100周以上走った児童に賞状を出した。児童は自分なりの目標を持って自主的に走るようになった。

新体力テストに向けては、児童が自分の体力を知り、体力向上への意欲付けが図れるよう練習中に県平均を目標値として示したり(ボール投げでは県平均値にカラーコーンを置く等)、校内記録を掲示したりした。

(3) 保健調査統計部の取組

① 生活習慣カレンダー

規則正しい生活について、家庭と連携して見直しを図ることで学習に取り組むための基盤となる健康な体づくりに対する意識の向上を図った。

② 生活習慣改善のための啓発授業

生活習慣を改善するために、すべてに関わってくるものが「睡眠」である。そこで、学年の実態から、心身の発育・発達、心身の健康を高める生活など、児童が自分の健康状態について関心をもち、身近な日常生活における健康の問題を、「生活習慣カレンダー」の結果から原因を見付け、課題を自己実現していくための啓発授業を、全学級で行った。



③ 生活習慣で体力アップ

学校の日常生活の中で「歌う姿勢」や「清掃の仕方」に工夫を加え体力アップにつなげる取り組みを行った。「歌う姿勢」は、かかとを少し上げると、お腹に力が入って高い声が出やすくなり、ふくらはぎも鍛えられるため、かかとを上げて歌うよう声かけを行った。「清掃の仕方」では、机運びは、引きずらずにしっかり持って運ぶよう指導した。机をななめに持つと運びやすくなることを伝え、全員が取り組めるよう支援した。また、教室のからぶきでは、「体育のすくすくプログラム」にある、くまさんのポーズで、ひざをつけずにからぶきをするようにさせている。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 年間指導計画や運動場等の割り振りを見直すことで、大規模校でも効率よく運動場等を活用するようにし、児童一人一人に運動の楽しさを追求する授業を実践することができた。
- ② 学習カードを活用した「めあて学習」を行い、児童一人一人が主体的に学習に取り組めるようにすることができた。
- ③ 授業の改善と外遊びの励行により、運動の質の向上や運動量を確保し、運動の楽しさを味わわせることができた。
- ④ 友だちと教え合い、励まし合う活動を取り入れることで、子どもたちが共に高め合い達成する喜びを共感することができた。
- ⑤ 「生活週間カレンダー」や「たいいく通信」を通して学校と家庭の連携を図り、生活習慣の更なる工夫と改善を行うことができた。

(2) 課題

- ① 学習カードを活用しためあて学習、全校でのチャレンジギネス、そして生活習慣カレンダーを通じた家庭との連携をさらに推進し、一層の研究を目指す。
- ② 授業の充実と望ましい生活習慣の定着を目指し、心身共に健康な児童の育成を図る。
- ③ 2年間の研究を振り返り、有効な手立てや指導法を整理し、次年度以降も「南古谷小学校の体育」として定着と深化を継続する。

「学びのよさを味わえる子どもの育成」 ～算数科における指導法の工夫・改善を通して～

川越市立大東東小学校

研究のポイント

- 日常生活や学習の中にある「学びのよさ」とは何か。
- 問題解決的な学習の流れや習熟度別学習を取り入れた指導法の共通理解。
- 系統性を意識した学習内容や教室環境。

1 研究の概要

大東東小学校では、10年ほど前から体育、そして国語と、教科指導を中心に校内研究を行ってきた。しかし、「努力の成果が児童自身にもとらえやすい算数を選択しよう」「算数はできるようになると楽しくなり、勉強が好きになる子どもが増える」などの理由から、市の研究委嘱を受ける1年前（平成24年度）より算数の研究を始めることになった。

当初から、研究主題を「学びのよさを味わえる子どもの育成」と設定し、1年目は大きな主題を念頭に置きながら、まずは算数科における「確かな学力」を身に付けることが重要と考えた。それは、学習指導要領の算数科の目標に到達することであるととらえ研究を進めたが、子どもの実態や教師の指導

《学習指導要領》

算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。

法に大きな開きがあり、研究の難しさが露呈した。そこで研究構想を複数年計画とし、初年度の目標を全教員が問題解決的な学習の授業の流れを共通理解し、全学年で統一された指導法として、できる限りの単元で授業に取り入れるよう研修を重ねた。また、全員が研究授業を行い、机上の理解だけでなく実践的な理解に努めた。その成果として、学習の流れやノートの使い方、教室掲示などが学校全体で共通理解されたため、翌年度進級しクラス替えをしても指導法の差が小さく、子どもたちはスムーズに授業を始めることができた。しかし、子どもたちの学力の個人差に対する支援の難しさや、自力解決から発表、練り上げに至る指導法や時間配分などが課題に残った。

研究委嘱として新たにスタートした2年目は、それぞれの学年で様々な角度から子どもの実態に合った研究を進め、成果と課題を積み重ねることで次年度につなげようと考えた。低学年では、操作活動や個別支援の方法に重点を置いて研究し、中・高学年では個人差への対応の一つとして、習熟度別学習に取り組み始めた。研究を深めると、想定していたようにたくさんの課題に直面し、その中でも主題である「学びのよさ」とは何かという研究の根幹に関わる言葉が、再度確認すべき問題となった。そこ

で、もう一度主題を見直し意見を出し合うことで、たくさんの「学びのよさ」があることを確認し、一つ一つの授業の中で、子どもたちがそれを感じ取っていけるような指導を目指し、3年目を迎えることとなった。

まとめとなる今年度も同じ主題を掲げ、「問題解決的な学習」「習熟度別学習」に加え、「系統性」を意識した研究に取り組んできた。また「算数便り」を発行し、「どんな授業展開をしているのか」「どんな指導法があるのか」など、保護者への情報公開にも努め、現在に至る。

2 研究の内容

(1) 「学びのよさ」

下表に様々な「学びのよさ」を示した。これらを内包した主題の意味は、かなり大きくとらえることができる。そして、主題の先には「学校教育目標」や「教師の願い」があり、主題を達成するためには、本校の子どもたちの実態を踏まえた研究をしなければならない。そこで副題にあるように、指導法の工夫・改善にしばって、研究を進めることにした。

学習段階	学びのよさ	指導法の工夫・改善 ○一斉指導、T.T. (◎特に少人数、習熟度別)
つかむ	【学習意欲をもつよさ】 ・何が始まるのかというワクワク感 ・問題を解いてみたいと思う気持ち	○既習内容のふり返し、確認 ○問題づくり (◎問題の難易度) ○具体物、半具体物の準備 ○問題提示の仕方
見通す	【見積もりや作戦を立てるよさ】 ・答えの予想をする楽しさ ・既習の方法から作戦を考えるおもしろさ	○既習内容の想起 ○見積もりのくり返し
解く	【既習の考えを活用し、自分で考えるよさ】 ・既習内容を使えば解ける安心感 ・よりよい解決方法を考える楽しさと 思いついたときの嬉しさ ・自力解決できたときの喜びと できないときの悔しさ ・用具が上手に扱える楽しさ	○算数コーナーの充実 ○系統化されたノート指導 ○時間の確保 (◎時間配分の工夫) ○支援の工夫
話し合い	【表現したり気づいたりするよさ】 ・発表や説明ができたときの嬉しさ ・新しい考えに気づいたときの驚き ・共感する喜び ・比較して考える楽しさ ・話し合いで解決が進む心地よさ	○発表形態の多様化 (◎コースに合わせた多様な考 えの共有) ○練り上げ構想の工夫
まとめ	【学習が身につくよさ】 ・本時の学習内容が分かった達成感 ・学んだことを次の学習に生かせる期待感と次 の学習で生かした時の心の高揚 ・新たな疑問がわいてきたときに感じる 次への意欲	○自分の言葉でまとめさせるた めの工夫 ○適用問題の時間確保 (◎時間配分の工夫) ○自己評価の積み重ね
授業外	・算数における学習の流れや得た知識を 他の教科に生かせるようになる幅の広がり ・学んだことを日常生活に生かすことができる すばらしさ	○国語、社会、理科などの教科に おけるある程度の学習展開の 統一 ○日常生活と関連する問題づく り(速さ、時間、代金、長さな ど)

(2) 研究仮説

指導法の工夫・改善として、研究仮説を「系統性を意識した『授業の展開』や『環境の整備』を進めることで、子どもたちは着実に学力を身に付けるであろう」とした。

いずれにおいても、児童の成長に合わせた内容を系統立てて配置することで、学年間の溝が少なく、学習の積み重ねができるようにした。

【授業の展開】		
・学習の進め方	・問題提示や難易度	・算数コーナーの利用
・自力解決の支援	・多様な発表方法	・練り上げの仕方
・自己評価	・板書とノート指導	
【環境の整備】		
・教室掲示	・算数体験コーナー	・校内掲示
・学習形態（一斉指導、少人数指導～習熟度別学習など）		
・少人数担当の配置システム		
・算数図書	・算数便り	

(3) 目指す子ども像

目指す子ども像については、昨年度までの子どもたちの実態からブロックごとに設定した。低中学年では、算数アンケートにより、学力不足を感じている子どもが最も意欲を失っているという結果を鑑みて、「意欲」に重点を置いた目標となった。また高学年では、発表から練り上げに至る「気付き」に重点を置いた目標にした。これは、自力解決した自分の考えと他の意見を比べながら、新しい考え方の発見やよりよい解法を選択する力を身に付けていくことが重要と捉えたためである。

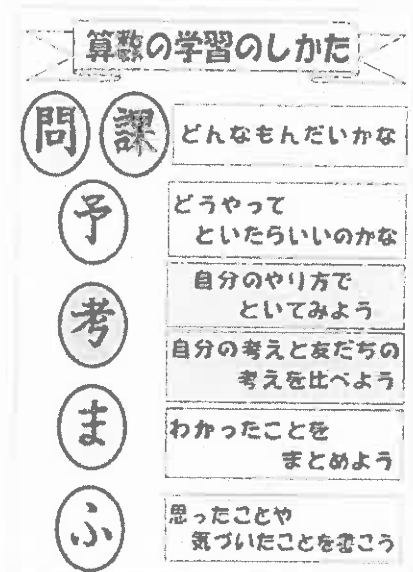
3 研究の実践

(1) 授業

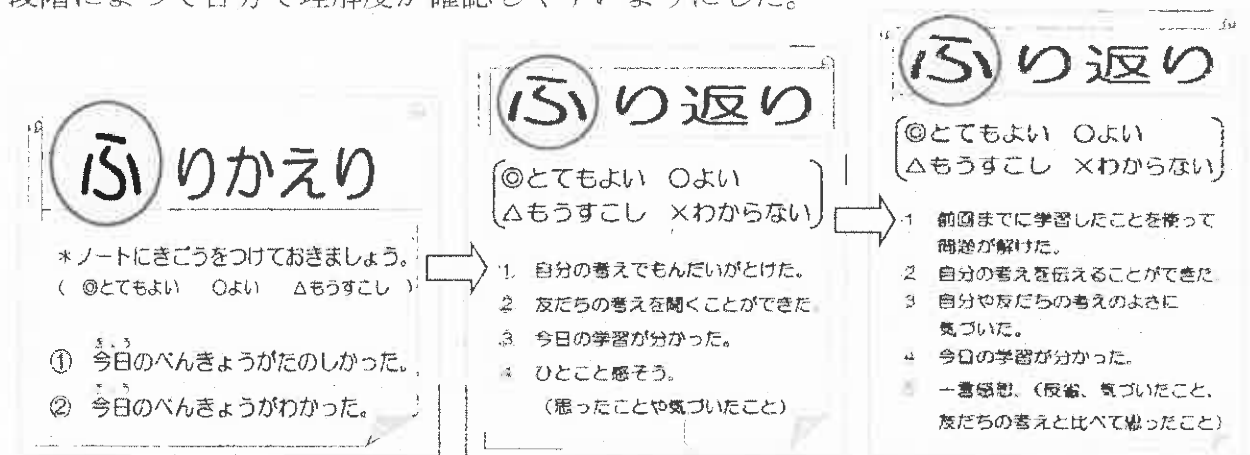
学習の流れや板書、ノートの使い方、自己評価、算数コーナーなどの教室掲示を学校全体でそろえることで、子どもたちも教師も見通しをもって授業を進めることができるようになった。低学年では、具体物による操作活動や個別支援の方法に重点を置き、中・高学年では、多様な発表方法や練り上げの仕方を研究した。さらに個人差への対応の一つとして習熟度別学習を行い、問題の難易度を変えるなど授業内容の工夫に取り組んだ。

(2) 系統性

1年生では、問題解決的な学習の流れの導入として、ワークシートによる自力解決の仕方や小集団による学習支援など、基本的な学び方を指導した。2年生では、ワークシートから学習の流れに沿ったノート指導へと移行した。3年生では、学級内で単純に人数を分けただけの少人数指導から習熟度別学習へと徐々に移行し、4年生で学年習熟度別学習を実施できるよう進めた。また、コース選択の意味理解も指導した。



そして高学年では、「学びのよさ」を味わえる子どもが育成できるように、指導重視のコースから子ども主体の発表や話し合いに加え発展問題を考えるコースまで、習熟度別の授業内容を工夫して授業に臨んだ。さらに自己評価にも系統性を考え、学年の段階によって自分で理解度が確認しやすいようにした。



【低→中→高学年への段階的な変化】

(3) 学習環境

学期ごとのアンケートにより子どもたちの実態を把握し、そのデータを学習内容の工夫に生かした。また、算数と日常との関連を意識させるため、体験コーナーや校内表示を充実させ、机上の学習だけでなく実感できる学習となるよう工夫した。さらに、算数便りを毎月発行し、「今の算数がどのように指導されているか」を保護者へ情報公開した。それとともに、問題解決的な学習のメリット・デメリットも知らせ、家庭学習の協力を求めた。



4 研究の成果と課題

本校の3年間の取組により、何よりも子どもたちから学習への意欲が感じられるようになった。その理由として、学校共通の系統立てた指導法が確立してきたこと、また、子どもたちも問題解決的な学習の流れに慣れてきたことが挙げられる。低学年では、操作活動や小集団指導などが意欲向上や学習支援となった。また、苦手意識が強くなる中・高学年では、習熟度別学習を取り入れることで、子どもたち個々の理解度に応じた自力解決の力を向上させることができた。少しずつではあるが、それぞれの気づきをみんな話合い、共有できるようになった。

しかし、子どもたちの個人差への支援の難しさが課題として残っているのが現状である。その解決のために、限られた教員数で最も有効的な学習形態を工夫しなければならないということも難問といえる。他にも自力解決から発表、練り上げに至る指導法や時間配分などが課題に残った。

もちろん本校の研究はここで終わりというわけではなく、これからも「学びのよさ」を味わえる子どもの育成に努めたい。

研究主題

「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら学ぶ子の育成」

～学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して～

川越市立霞ヶ関小学校

研究のポイント

- 授業の中で、学び合い、高め合う場の設定を工夫することによって
 - ① 分かる楽しさを味わい、より深い知識が定着した児童を目指す。
 - ② 生活上必要な習慣や技能を身に付け、進んで学ぶ児童を目指す。
- 理科や生活科の関心が高まるような環境を整備することにより、自ら学ぶ児童の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

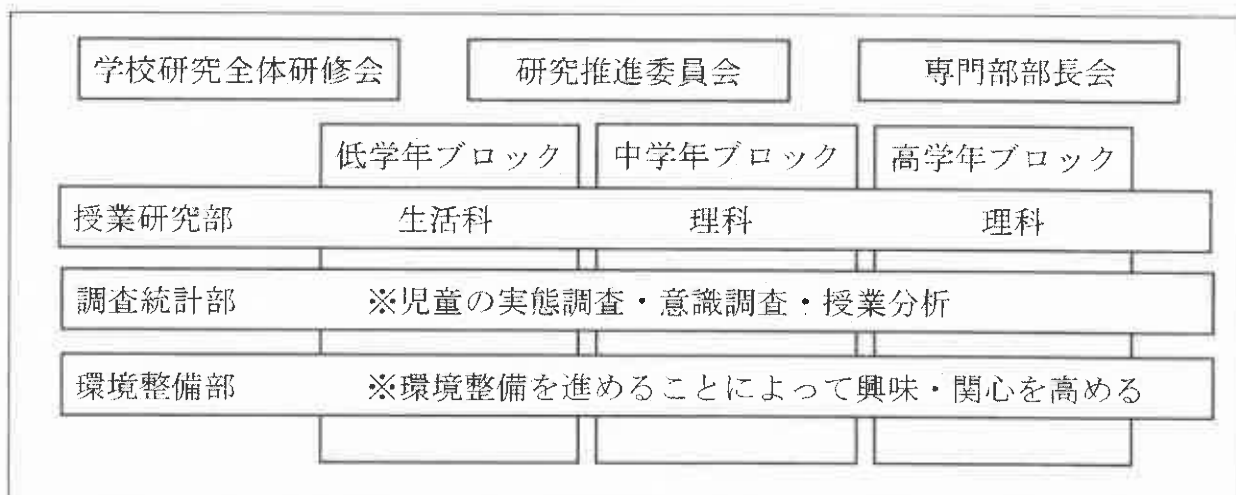
理科・生活科の授業において「学び合い、高め合う場の設定」を通して、より深い知識の定着、生活上必要な習慣や技能の習得を図る。

(2) 研究主題設定理由

理科離れ、理科学力の低下が叫ばれて久しいが、本校においても楽観を許さない状況となっている。平成25年度の埼玉県小・中学校学習状況調査では、理科正答率、県 67.3 %に対して、本校 62.7 %となっている。家庭学習の不足等、様々な要因が考えられるが、授業内容を改善し、理科に対する関心・意欲を高め、科学的な思考力の向上、知識の定着が急務であると考え、平成24年度より理科・生活科を中心に学校研究に取り組んだ。

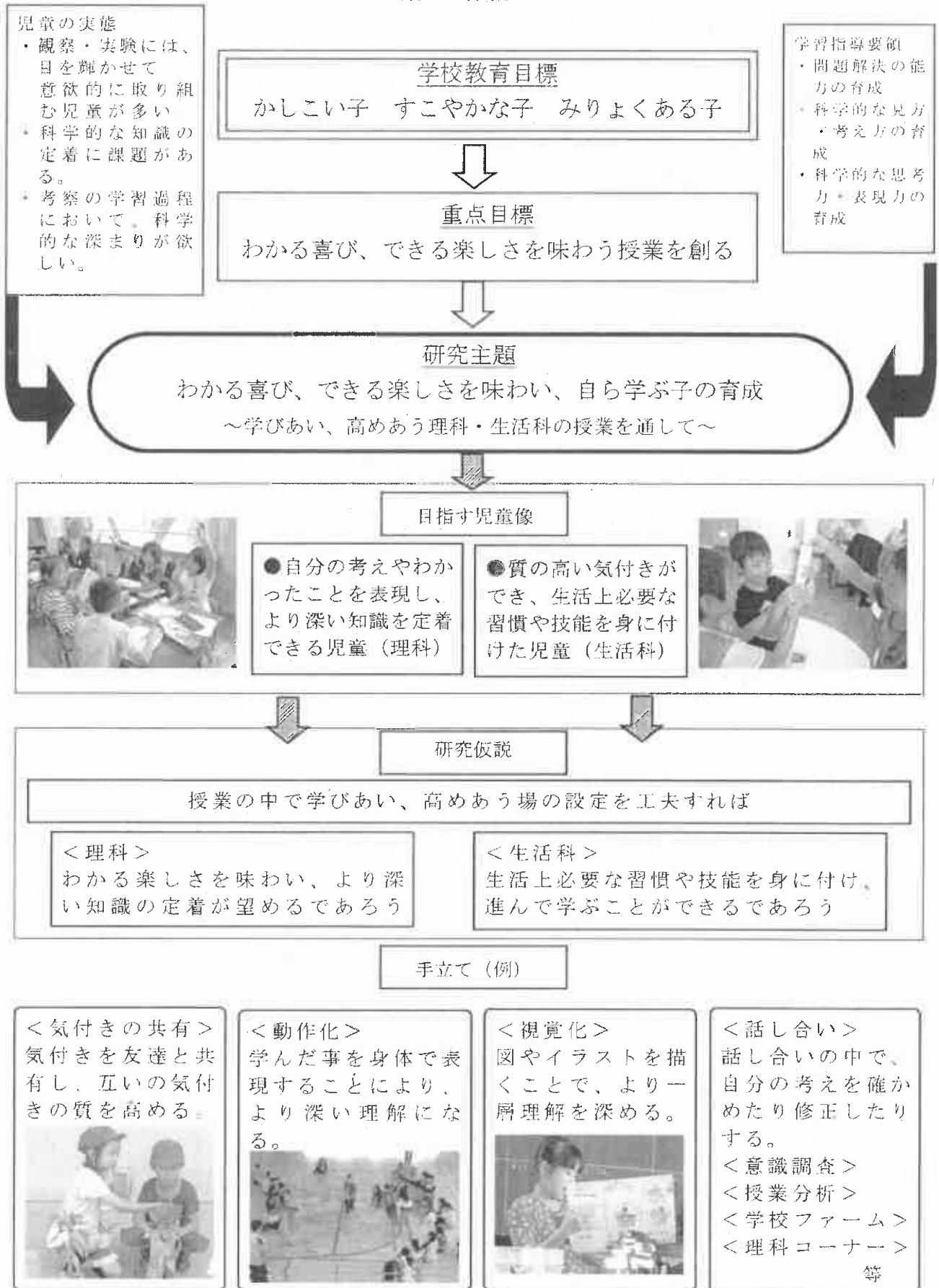
平成25年度からは、「かすみ」を頭文字にして「か」考える「す」好きになる「み」身に付くを合言葉に研究を進めたが、26年度は、特に研究の焦点を「み」身に付くにあて、より深い知識の定着、生活上必要な習慣や技能の習得を目指して研究に取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

研究全体構想



3 実践事例

(1) 授業実践例（第4学年 ものの温度と体積）

① 研究主題との関わりについて

手立て①

児童に課題、予想、実験、結果を4枚のイラスト入りのプリントにまとめさせる。実験の様子や結果を図に書きこんだり、キャラクターの吹き出しにセリフを書きこんだりしながらまとめていくことで、学習内容の確実な定着を図る。

手立て②

課題について、一人で考える→隣同士で教え合う→グループで話し合う→全体で共有する・・・など、スモールステップで、話し合い集団を少しずつ広げていくことで、理解を深め、学習内容の確実な定着を図る。

② 学習指導

ア ねらい

- ・3つの実験の共通点や違いに気づき、自分の考えを表現することができる。
- ・空気、水、金属の体積変化について、これまでの学習をもとにまとめることができる。

イ 展開

学習活動	主な教師の発問 (T) 予想される児童の反応 (・)	留意点 (○) 教師の支援 (◆) 評価の観点 (☆)
1 前時までの学習内容を振り返る。	T：これまでどんな実験をしましたか。 ・空気、水、金属を温めたり冷やしたりした。	○前時までに作った児童のまとめを提示しながら、振り返りを行う。
2 本時の学習課題を確認する。	課題：ものの温度と体積の学習をまとめよう。	
3 今までの実験を、イラスト入りのプリントを使ってまとめる。	T：今までの実験から分かったことを、最後の用紙にまとめましょう。	◆なかなか書けない児童には、ヒントカードを使って助言する。 ☆【思考・表現】3つの実験の共通点や違いに気づき、自分の考えを表現することができる。(プリント)
<p>手立て① 実験の様子や結果を、図に書きこんだり、吹き出しに書きこんだりしながらまとめる。</p> <p>・ペアでの確認。</p>	T：隣の友達と見せ合って確認しましょう。 T：書いたものを一人ずつ発表しましょう。全員終わったら、みんなの考えを一つ	○プリントに書いたことをもとに話し合わせる。 ○児童のプリントを拡大した紙を各グループに渡し、まとめさせる。
4 グループ内で発表し合い、1つにまとめる。		

<p>手立て② 話し合いの場を設ける。</p>	<p>にまとめましょう。 ・グループごとの話し合い</p>	<p>◆必要に応じて、話し合いを支援する。</p>
<p>5 グループごとに発表する。</p>	<p>T：グループでまとめたことを発表してください。 ・各グループの発表</p>	<p>○各グループの代表の児童に、前で発表させる。</p>
<p>6 本時のまとめをする。</p>	<p>T：一番分かりやすかったのはどれですか。 T：各グループの発表から、分かったことをまとめましょう。</p>	<p>○各グループの発表からキーワードをおさえ、自分の言葉でまとめられるようにする。</p>
<p>☆【知識・理解】空気、水、金属の体積変化について、これまでの学習をもとにまとめることができる。〈プリント・発表〉</p>		

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 学年園や掲示物、理科コーナーなど校舎内外の環境が整い、児童の理科に対する関心・意欲の高まりが見られた。
- ② 学習過程（課題→仮説→観察・実験→考察→まとめ）を検討し、板書やノートの取り方等を通して全クラス統一することで、児童が見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。
- ③ 教職員が力を合わせ思考、実践、改善を行うことで、学んだことを身に付ける様々な手立てを考案することができた。
- ④ 児童の実態を把握することで、理科、生活科に関する子どもたちの思いや学習上の課題をとらえることができ、効果的な対応を図ることができた。
- ⑤ 研究を通して教職員の意識が変わり、協力して授業準備を行うなど、相互に学び合う環境が整った。

(2) 課題

- ① 児童の学力向上は十分とは言えず、科学的な思考力、表現力の向上など今後も引き続き総合的な学ぶ力の育成に向けた取組、工夫、改善を図る必要がある。
- ② 研究の成果が今後も続くよう、組織、仕組みづくりが必要である。

研究主題

「いきいき表現 育てよう確かな力」 ～一人一人の願いや思いを大切にし、豊かな表現のできる児童の育成～

川越市立霞ヶ関南小学校

研究のポイント

- ・児童がもつ感性（感覚・感じ方・表現の思い）を十分に働かせる。
- ・自分で考えて、判断し、表現して発信する力を養う。
- ・教師がまずやってみて、素材のおもしろさや楽しさを数多く体験する。

1 研究の概要

(1) 研究の目的：「図画工作科の授業を通して、自立する心を養う。」

これからの社会を生き抜いていくためには、自分で考えて判断し、自分なりに表現して発信していく力がより一層求められる。真っ白な画用紙に、誰をたよることなく、いきいきと表現すること、それに教師が応え、その子の願いや思いを共感的に受け止めることで、児童の自己肯定感を高め、ひいては自立する心を養うことにつながると考えた。

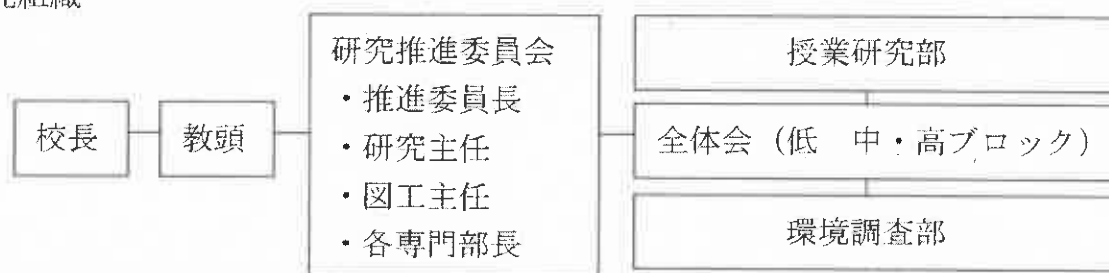
(2) 研究主題設定の理由

本校の特色は、各行事において学年学級が一丸となって取り組む校風がある。そして、そうした学校生活の基盤となる、あいさつ、廊下歩行、くつそろえなど、ライフスキル教育に力を入れている。さらに、縦割り班活動を計画的に取り入れ、上級生と下級生の交流の中から責任感や思いやりの気持ちを育てている。

素直で、あいさつも元気よくできる児童は多いが、それを自分から進んで表現していくところまではいきついていない。まだまだ、教師の働きかけによる部分が多く見られる。学習中の発言や発表においても自信がもてず、消極的になってしまう児童も多い。

そこで、研究の目的を「図画工作科の授業を通して、自立する心を養う。」とし、研究主題を「いきいき表現 育てよう確かな力」と設定した。ここでいういきいき表現とは、自分の感覚や感じ方、表現の思いなど、感性を十分に働かせる活動とし、確かな力とは、自分で考えて、判断し、自分なりに表現して発信する力とした。また、子どもを信頼し、子どもの考えや工夫、素材を感じる気持ちを引き出す授業が展開できるよう、副題を「一人一人の願いや思いを大切にし、豊かな表現のできる児童の育成」とした。

2 研究組織



3 研究内容

仮説

題材のねらいを存分に味わえる授業や場作りの工夫を行えば、子どもたちはいきいきと表現することができるであろう。

手立て① ねらいに沿った指導計画を導く教材研究

製作活動を試してみる。そこから用具や場が決まり、活動の可能性やつまずきが予測できる。

教師がまずやってみる

場や技法、道具の設定



手立て② 児童の製作意欲を引き出す板書の工夫



手立て③ 発想、構想の能力を高める

「お試しタイム」

何度も試しながら
技法にふれ、気づきや発見を大切にする。



「ひらめきタイム」

業前時間を活用して
素地を養う。



手立て④ 図工室の整備

【技法の掲示】

【材料銀行】

【道具の整備】



4 実技研修（講演）

回	月 日	種類	内容
1	4月15日	講演・実技	「知っていてよかった 基礎・基本～表現のイ・ロ・ハ」 石野道子 校長
2	5月26日	講演・演習	「図工研究の諸課題における具体的手立て」 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 岡田京子 先生
3	6月25日	講演・実技	「～ねん土でにゅ 秘密基地～」 武蔵野美術大学教授 三澤一実 先生
3	8月22日	美術館研修	「多版多色刷りの実演と鑑賞～川瀬巴水～」 川越市立美術館主幹 谷平絵美子 先生
4	8月25日	講演・実技	「小さな美術館」 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 岡田京子 先生
5	8月27日	講演・実技	「へんてこ山の物語」「ゆめいろランプ」 戸田市立喜沢小学校 長尾宏一 先生

5 授業実践

回	月 日	種類	内容
1	9月16日	授業研究	第2学年 題材名 「生み出せ ぼくわたしのパール」 指導者：西部教育事務所教育支援担当主任指導主事 鈴木勢津子 先生
2	11月17日	授業研究	第5学年 題材名 「わたしだけのぼうし」 指導者：大東西中学校 教頭 田中晃先生
3	11月25日	授業研究	第4学年 題材名 「見つけた おとぎの国の友だち」 指導者： 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 岡田京子 先生
4	1月20日	研究発表会	第1学年 題材名「いろ いろいろ みいつけた」 指導者：西部教育事務所教育支援担当主任指導主事 鈴木勢津子 先生 小中連携第3学年中学2年 題材名「わたしの“竹取物語”」 指導者：大東西中学校教頭 田中晃 先生 第6学年 題材名「思い出のものを思い出の色で」 指導者：所沢市立東所沢小学校長 向井茂樹 先生 つくし 題材名「ダ、ダ、ダ、ダンボールだあ!」 指導者：埼玉県教育委員会特別支援教育推進専門員 渡部庄一 先生

6 成果と課題

- 教師が研修を通して、子ども達の製作過程の見取りができるようになった。その結果、子ども同士の交流が深まり、自分らしい表現を思いきりできるようになった。
- ◆図画工作科で身に付けた表現力を他教科等にも広げていく。

「進んで運動に取り組む運動好きな山田っ子の育成」 ～仲間と豊かにかかわり、「できる」「わかる」「のびる」学習指導の工夫～

川越市立山田小学校

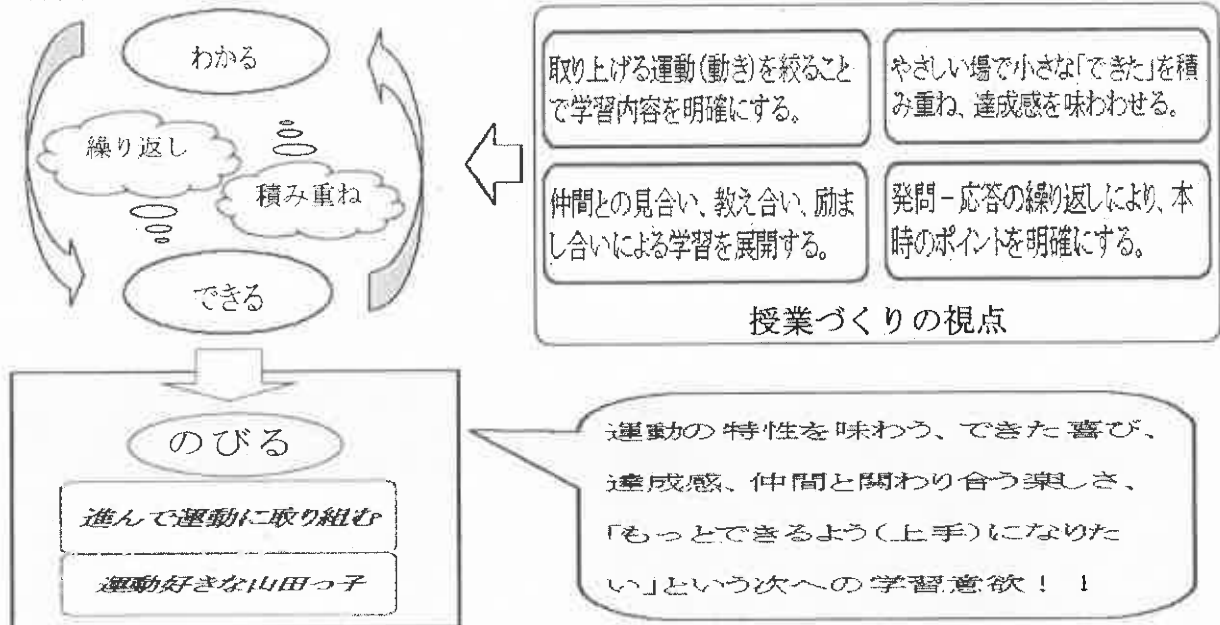
— 研究のポイント —

- 仲間と豊かにかかわり、「できる」「わかる」「のびる」喜びや自信を育み、進んで運動に取り組む運動好きな児童の育成を目指す。
- 実習や実験等を取り入れた保健学習の工夫と授業の充実を図り、心身ともに健康な児童の育成を目指す。
- 「跳の運動（陸上運動）」「跳び箱を使った運動（器械運動）」に視点を当てた学習指導の工夫と授業の充実を図り、教師の授業力の向上を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

仲間と豊かにかかわり、進んで運動に取り組む運動好きな児童の育成を図る。



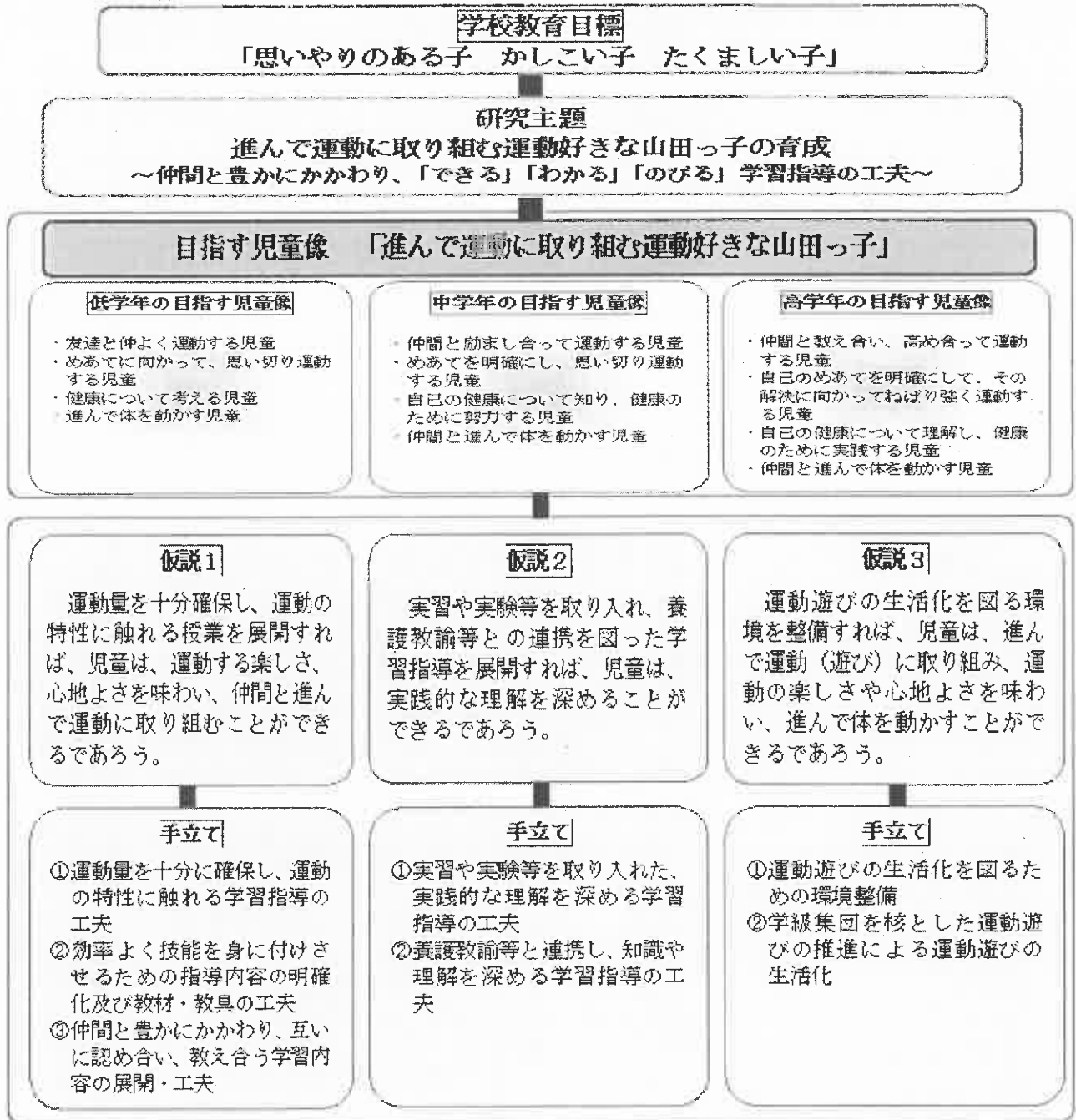
(2) 研究主題設定の理由

体育科授業においては、自分が得意とする運動種目については進んで取り組むが、できない動き（技）となると児童の学習意欲は停滞し、「無理」「できない」と言って、あきらめてしまう傾向にあった。そこで、教師が場の設定を易しくしたり、課題となる運動のポイントやコツを示したりすると進んで運動に取り組むことができると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



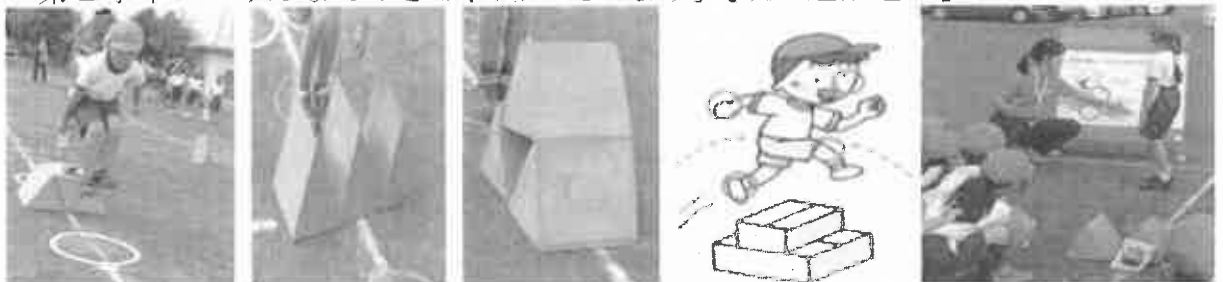
2 研究の内容



3 実践事例

(1) 授業実践

- ① 第1学年 「びよんびよんランドで楽しもう」【跳の運動遊び】
- ② 第2学年 「みんなでめざせ、川ごえじょう」【跳の運動遊び】



【興味関心を高める工夫・場の工夫】

【学習のまとめ】

③ 第3学年 「けんこうな生活」【保健】

④ 第4学年 「育ちゆくからだわたし」【保健】



【ITでの授業展開】

【実践的な理解】

⑤ 第5学年 「跳び箱運動」【器械運動】

⑥ 第6学年 「跳び箱運動」【器械運動】



反りこぎ



【準備運動】

【技のポイントを確認】

【学習のまとめ】

(2) 専門部の活動

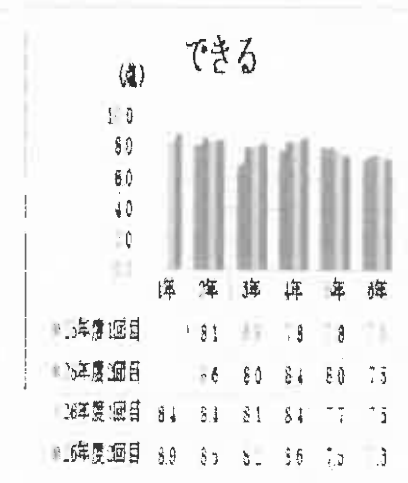
① 学習指導部

- ・指導案形式の統一
- ・学習過程の明確化
- ・「すくすくプログラム」を取り入れた準備運動
- ・技能系統表の作成
- ・掲示資料、学習資料の作成
- ・形成的授業評価を取り入れた学習カードの作成



② 調査啓発部

- ・診断的、総括的授業評価に関する研究と考察
- ・体育授業に関する児童の反応の変遷の考察
- ・生活アンケートに関する考察
- ・新体力テストに関する考察



県体力標準値達成率

平成 25 年度 41.7 % (40/96 種目)

平成 26 年度 46.9 % (45/96 種目)

③ 環境整備部

- ・関心・意欲を高める環境作り
- ・体力向上を目指した環境整備
- ・運動遊びの生活化を図る環境整備



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・「跳び箱運動」では、技能系統表を踏まえた学習内容を明確にし、6年間を見通した系統的な指導を行うことができた。児童の実態に応じた学習を展開し、児童のつまずきに応じたスモールステップの練習の場や指導方法を工夫することができた。
- ・技能構造を分析し、分かりやすい技能ポイントを提示することで、児童は自分のめあてを持って学習に取り組み、確実に技能を身に付けることができた。また、児童同士の教え合いの質の向上も見られた。
- ・保健学習では、実習を取り入れた学習を展開し、児童は実感を伴った理解を得ることができた。また、養護教諭の専門的な立場からの指導や助言により知識理解を深めることができた。
- ・運動遊びの生活化を図るための環境整備として、体力向上のための教具を継続して設置することで、業前時間や休み時間に積極的に外遊びを行う児童が増えた。体力テストの結果で記録の向上も見られたことから、少しずつ効果が見られてきた。

(2) 課題

- ・限られた時間の中で、より効果的に技能を習得させる指導方法をさらに工夫・改善していく必要がある。また、児童同士の教え合いをより活性化させる方法を探っていく必要がある。
- ・保健学習では、手洗いの歌などを作成し、授業で学習したことを生活に活かせるよう取り組んできたが、さらに幅広く児童の基本的な生活習慣の育成を図っていく必要がある。
- ・運動（外遊び）を積極的に行わない児童に対して、外で体を動かす時間を意図的に設定していく必要がある。また、体力向上のための教具を設置したが、さらに児童の興味・関心を引き出す工夫改善を行っていく必要がある。

研究主題

「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究」 ～生徒一人一人の意欲を引き出す「わ・た・しの授業」実践を通して～

川越市立高階西中学校

研究のポイント

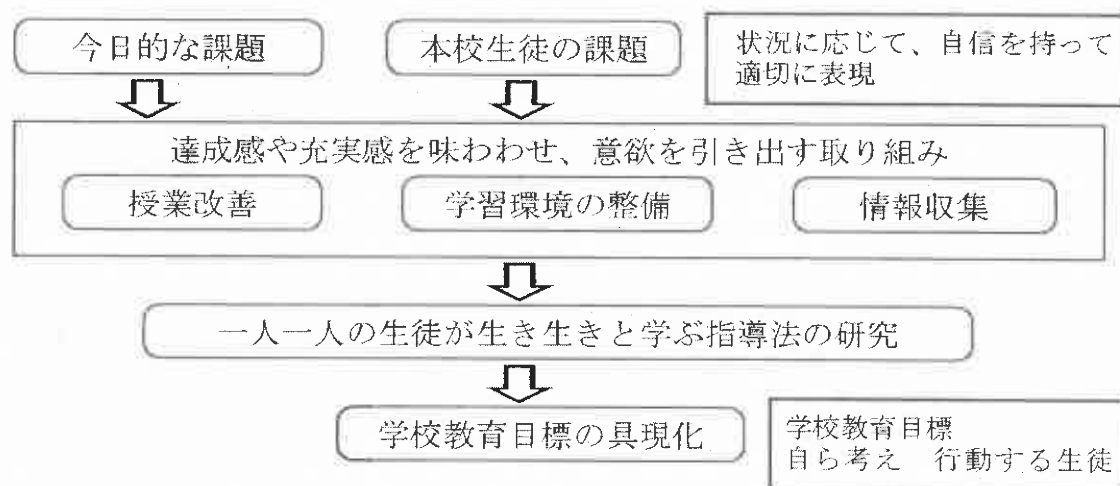
- 知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動を授業の中に位置付ける。
- 学ぶ意欲を引き出し、自己肯定感を高めるための学習環境を整える。
- 授業規律、あいさつ、発言の仕方を見直し、主体的に授業に取り組む姿勢を育てる。
- アンケート結果を分析し、生徒の実態を把握して取り組む。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「わかる授業」「楽しい(たのしい)授業」「主体的(しゅたいてき)な授業」の『わ・た・しの授業』を合い言葉に、生徒が主役となり、教師主導型の授業から、問題解決的な生徒主体の授業への転換をし、達成感や充実感を味わえる授業の取り組みと指導法について研究をする。

(2) 研究主題設定理由



『状況に応じて自信を持って適切に表現する』ことが、本校生徒の一番の課題である。その課題解決のためには「わ・た・しの授業」を充実させることが重要であると考え、全教職員で取り組んできた。その充実こそが「一人一人の生徒が生き生きと学ぶこと」につながると考え、本主題を設定した。

一人一人の生徒が生き生きと学ぶためには、まず基礎・基本の定着が必要である。言語環境を整えることで理解が深まり、思考力、判断力、表現力を育むことができる。基礎的・基本的な内容の確実な定着を実現するためには、「一人一人が、自分のものの見方や考え方を持って判断し、行動することができること」や「一人一人がじっくり学習に取り組み、学ぶことの楽しさや成就感を味わわせ、自ら学ぶ意欲を育てることができるようにすること」が重要である。そして、知識や技能にとどまらず、資質や能力も含めた各教科の学習で習得した知識・技能などを活用し、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、説明や論述、対話などの言語活動を通して表現できるようすることも重要である。そのために、学習内容や指導方法を工夫・改善をすることが、教職員の「わ・た・しの授業」をより充実させることになる。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ることにより生徒が生き生きと学ぶことができる。

① 手立て1

各教科において、言語活動を充実させた授業を行えば、生徒の思考力、判断力、表現力を育むことができ、生徒が生き生きと学ぶことができる。

ア 年間指導計画の見直しを図り、『言語活動の充実』の項目を加えるとともに、各教科・領域で『言語活動の充実』を図る授業を展開する。

イ 学習指導要領における目標・内容をもとに、学習目標、4観点（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」）の学習評価を明確にし、各単元の評価規準、学習活動における評価規準をもとに、指導と評価を行う。

ウ 授業では、1時間あるいは1単元を通して、基礎・基本の定着を重要視して授業を行う。

② 手立て2

学習内容を精選し、指導方法の工夫・改善により、「基礎・基本」の定着を図れば、生徒が自信を持ち、生き生きと学ぶことができる。

ア 授業計画(1時間、1単元)のなかで評価場面を設定することにより、生徒のつまづき、理解や習熟の度合いを観察・把握する。

イ 個別指導や繰り返し指導、補充学習を行うことにより、個に応じたきめ細やかな授業を行うことにより、基礎・基本の定着を図る。

ウ 自己評価カード等を活用することにより、学習の定着、自己の成長が見いだせるような工夫をする。

エ 習熟度別学習、個別学習、グループ学習等の学習形態を取り入れ、学習内容に合わせた取り組みをする。

オ 学校図書館やコンピュータ教室等の施設を活用すると共に、デジタル教科書の活用により、生徒の興味・関心を高める工夫をする。

カ 観察・実験、調査・研究、発表・討論などの体験的な学習、問題解決的な学習を通して、言語活動の充実を図る授業を展開し、思考力、判断力、表現力などを育成する。

キ 課題を与えるだけでなく、自分で見つけられるような授業の展開を工夫する。

③ 手立て3

学習規律を確立し、学習環境を整えれば、落ち着きがあつて、しっかり考え安心して発表ができる授業が展開され、生き生きと学ぶことができる。

ア 始業、終業、号令、あいさつ、発表の仕方等の確認と確実な実施。

イ 教室、廊下を含めた教室環境、及び、昇降口、各階踊り場、特別教室、職員室等の掲示物の充実と整備を図る。

ウ 学級活動、特別活動等の充実を図る。(自主的な活動、自己存在感の感じられる学級・集団)

エ 家庭学習ノートを活用により、自分から進んで学習に取り組む姿勢を育てる。

3 実践事例

(1) 研究授業の実施

研修の一環として、各自が「わ・た・しの授業」を実践し、年間1回以上、指導者を招いて、研究授業を実施した。

平成25年度 10月23日(水)～2月6日(木)の期間に全職員研究授業を実施。

平成26年度 7月3日(木) 川越市教育委員会・西部教育事務所学校指導訪問。

1月14日(水)、16日(金)の2日間で全職員研究授業を実施。

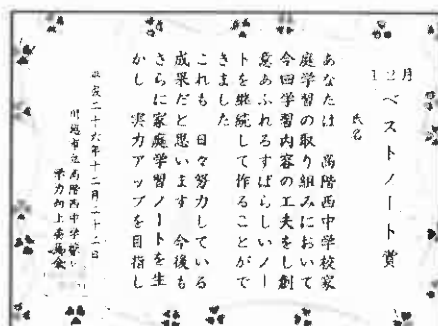
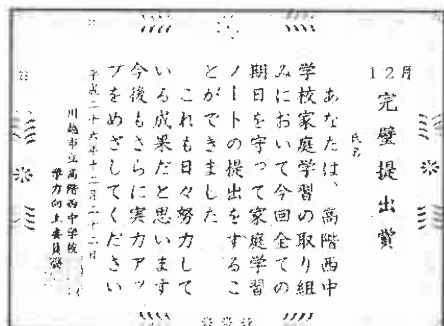
(2) 家庭学習の取り組み

全校生徒が家庭学習を毎日行い、翌日提出する。毎日忘れずに提出した生徒、工夫したノートを作成した生徒に賞状を出す。意欲的に家庭学習に取り組ませることで、学力向上を目指す。

① 大学ノート1ページ以上に家庭学習(教科は問わない)を行い、次の日の朝提出する。学年職員で手分けして、ノートを点検し、コメント等を書いて返却する。

② 1週間忘れずに提出できた生徒は、学年ごとに配布する週予定表の裏に氏名を掲載する。

③ 忘れずに提出できた期間により「月間完璧提出賞」「年間完璧提出賞」を、他の手本となるようなノートを作成した生徒には「ベストノート賞」を与え、賞状を学年朝会で渡して表彰する。学年通信にも掲載し、保護者にも知らせる。



④ 「家庭学習ナビ」という冊子を作り、年度初めに学年集会等で家庭学習について指導する。「家庭学習ナビ」の内容は、家庭学習によく取り組んだ生徒から他の生徒へのアドバイス、各教科の勉強方法、教員からのアドバイス、工夫されたノートのコピーなどである。

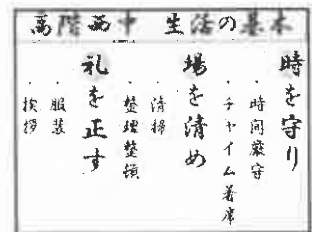
(3) 授業改善のための取組

知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動を授業の中に位置付ける。

- ① 基礎・基本を身に付けさせるための取り組みを行う。
 - ア 単元の始めと終わりにテストを行い、定着を確認する。
 - イ 基本的な用語、道具の使い方の確認を徹底する。
 - ウ 毎時間、前時の確認をしてから授業に入る。
- ② 助言の工夫をする。
 - ア 明確、簡潔な発問を心がける。
 - イ 全員が答えられる簡単な発問を必ず入れる。
 - ウ 多くの答えが出て、授業に広がりがある発問も必ず入れる。
- ③ 言語活動を充実させる。
 - ア スモールティーチャーとして生徒が教え合う時間を作る。
 - イ シナリオを用意して話し合い活動の型を教える。
 - ウ グループ学習を取り入れ、教え合い、励まし合いを積極的に行う。
 - エ 授業のまとめを生徒の言葉で行う。



- (4) 教室、校内環境の整備
 授業規律・挨拶・発言の仕方など当たり前に来てきたことを明文化し、統一して掲示した。また、右図のように、「高階西中学校生活の基本」をもとに、



- ① 時を守り → ノーチャイム
 - ② 場を清め → 洗心無言清掃
 - ③ 礼を正す → 語先後礼
- を具体的な取り組みとして実践した。

昨年度から『洗心無言清掃』に取り組み、静寂の中で清掃に取り組める環境になっている。無駄な会話がなくなることで、いつもの清掃+見つけ清掃にも力を入れることができ、気持ちの良い環境で学習に取り組むことができている。

保護者や地域の方からも、「学校がきれい」とお褒めの言葉をいただくことが多くなり、生徒のやる気にもつながっている。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 普段の授業の中に、言語活動の充実を図る活動の場面が、意識的に取り入れられるようになった。
- ② 教材研究への取組を増やし、導入の工夫や生活に関連した資料の提示をすることで、生徒の意欲的な態度につながることができた。
- ③ 家庭学習ノートを取組を行うことで、学習習慣の定着が図られ学習意欲を喚起できた。
- ④ 教員の共通理解を図り、基本的な学習環境を統一していくことで、教員が一体となって取り組んでいこうという態度が生まれ、環境整備や授業改善の意識向上につながった。
- ⑤ 学習規律を確立し、学習環境を整えたことで、落ち着きがあって、しっかり考え、安心して発表ができる授業が展開され、生徒が生き生きと学ぶことができた。

(2) 課題

- ① わかる授業・楽しい授業・主体的な授業を展開するために、与えられた課題だけでなく、自ら課題を見つけられるような授業の展開を図ること。
- ② 効率的に基礎・基本の定着を図りながら、生徒の主体的な活動の充実を図ること。
- ③ 授業の改善や環境づくりを継続的に取り組むために、より一層の共通理解を図ること。
- ④ 年間指導計画の見直しを図り、各教科・領域等で1時間毎の評価規準とともに、「言語活動の充実」の手立てを明確にした年間指導計画を作成すること。

「豊かなかかわり合いを通して、進んで活動できる児童の育成」 ～話し合い活動を基盤とした言語活動・体験活動の充実～

川越市立川越小学校

研究のポイント

- 国語の授業で身につけた言語力を他教科・領域に広げ、子ども同士のかかわりを通して「伝え合う」コミュニケーション能力の育成を目指す。
- 理科学習の場で、効果的な言語活動の場面を設定し、授業改善を行うことで論理的な思考力の育成を目指す。
- 特別活動を充実させ、授業を支える望ましい集団作りを目指す。
- 教師の創意工夫を引き出していくために、プロジェクトチームを再編し、リーダーを中心に主体的な実践研究を進める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

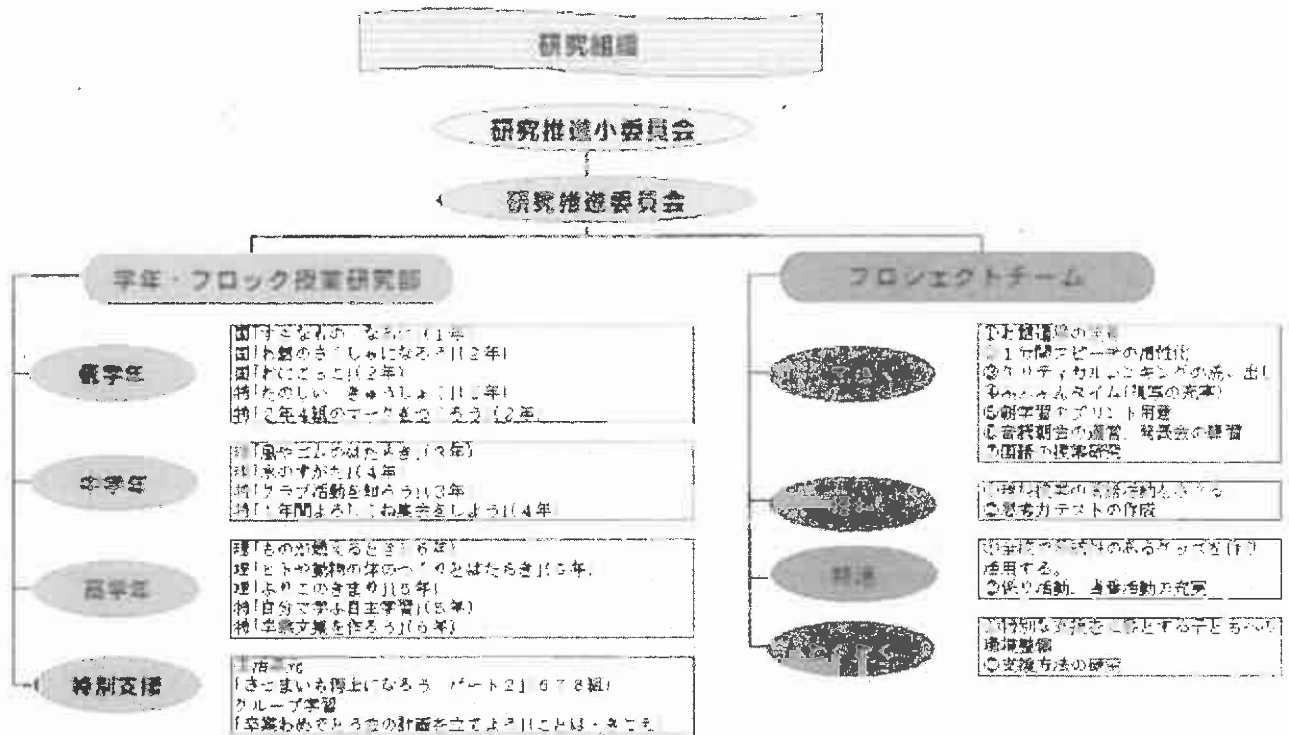
平成22, 23年度の2年間の国語科委嘱研究をふまえ、国語科の学習で取り組んでいる言語活動を一層推進しながら平成24, 25年度は、理科における科学的な思考力や問題解決能力の向上を目指してきた。平成26, 27年度は、授業を支える望ましい集団作りを視野に入れて国語、理科、特別活動の分野で研究を推進している。

(2) 研究主題設定の理由

研究を始めた平成22年度当初の本校の児童の実態として、「自己表現が苦手、自分の言葉でうまく表現することができない」ということがあげられていた。このようなことから平成22, 23年度の2年間は、国語科を中心に研究を進め、授業スタイルを定着させることができた。また、プロジェクトチームを中心に児童の言語感覚を磨く取組も実践してきた。国語科の学習で取り組んでいる言語活動を一層推進しながら平成24, 25年度は、理科における科学的な思考力や問題解決能力の向上を目指してきた。平成26, 27年度は、授業を支える望ましい集団作りを視野に入れて国語、理科、特別活動の分野で研究を推進し、総合的に機能する学力を身に付けることを中心に児童の学力向上を目指している。



(3) 研究組織



2 研究内容

話し合いのスキルを高めるための研究を継続しながら、目指す児童像を「認め合い 学び合い 高め合う子」としている。そして、今年度は、国語・理科・特別活動の教科や領域が互いに関係し合って総合的に機能する学力の向上を目指している。研究課題は、下記のように設定した。

課題1

言葉による表現力を身に付け、学び合う力を高めるために、児童が進んで思考・表現し、話し合うための手立ての工夫を図る。

課題2

論理的な思考力を育て、学び合う力を高めるために、理科の目標に合わせた効果的な言語活動の場の設定と授業改善を行う。

課題3

「自分から、そして自分たちで」活動できる力を身に付け、自治的能力を高めるために、支持的風土を醸成し、活力ある生活づくりを図る。

以上の課題解決に向けて、国語科では基礎的・基本的な言語力の育成、理科では論理的思考力の育成、特別活動では自治的能力の育成を目指している。そして、児童の思いや考えを話し合うことを通して「つなぐ」ということに力点をおき、他教科においても国語・理科・特別活動で培った力を広げ、深めていく。

3 実践事例

[国語科での取り組み]

- ・自分なりの読みを深めるために授業の流れをパターン化する。
(情報の取り出し→解釈→話し合い)
- ・お話道場(課題をもとに、役割分担をし討議することで考えを深め合う話し合いの場を設ける。)
- ・文ぶんタイム(視写力の向上を目指す。)
- ・音読朝会や音読発表会、家庭読書(親子ふれあい読書、ブックリストの活用)
- ・音読カード

[理科での取り組み]

- ・実験ブースの設営(休み時間に自由に実験ができるようにし、興味関心を高める。)
- ・レベルアップ会議の実践



[特別活動の取組]

- ・全学年での授業研究
- ・学級活動をスムーズにするグッズの全クラス分作成と活用
- ・係活動と当番活動の違いを明確にする。→係活動の充実

[授業研究例]

- (1) 議題名 「2年4組のマークを作ろう」
- (2) 実践例

①事前の活動

- ・議題の選定
朝の会を活用して全員で議題を選定する。
- ・学級会の計画
提案者の思いや願いがよく表れるような表現を工夫するようにする。
- ・自分の意見を考える。
あらかじめ、司会グループと担任でマーク案を複数にしぼりその中から選ぶようにする。
児童の学級会ノートに励ましの言葉を入れて意欲を高める。
(事前評価) めあてをよく考えて意見やその理由を記入しようとしているか。

②本時の活動

議題	2年4組のマークを作ろう
提案理由	今、生活科の秋まつりで使うおみこしを作っている。飾りや模様などをつけて4組らしくなってきたが、おみこしの上に4組のマークをつけるともっとおまつりが盛り上がると思う。

	4組には、合い言葉があるから、合い言葉にあったマークを作れば、おみこしや学級会の決定マークにも使えるし、これからおみこしを作っていく時にみんなの気持ちがひとつになるから。マークは、ぱっと見て4組だと分かるものの方がいいと思う。
めあて	簡単にかけて、4組らしいマークを考えよう
決まっていること	○マークは、1種類決める。 ○みんなで作る。 ○使う場所は、生活科で作るおみこしの上の大きい部分、おみこしの周りのかざり、合い言葉、決定マーク
児童の活動	指導上の留意点（・） 目指す児童の姿（◎）
1 はじめの言葉 2 合い言葉 3 司会グループ紹介 4 議題の確認 5 提案理由の説明 6 めあての確かめ 7 柱の確認 8 決まっていること 9 先生の話 10 話し合うこと ①どんなマークにするか。 ② 役割分担 11 決まったことの発表 12 振り返り 13 先生の話 14 おわりの言葉	<ul style="list-style-type: none"> 提案理由やめあてを意識した発言ができるよう、ホワイトボードに掲示し、提案理由もキーワードを目立つようにする。 学級会ノートより予想される理由を短冊シートに準備し、話し合いがスムーズに進むようにする。 今、話し合いがどの段階に進んでいるのか分かるように、「出し合う」「くらべる」「きめる」のカードを提示する。 短冊シートを操作することで、意見や理由を比較できるようにする。 活動時間を確保するために、学級会ノートをもとに「くらべあう」ところから始める。 話型を用意し、基本の流れで話し合いを繰り返すことで、誰もが司会ができ、話し合いに参加できるようにする。 ◎意見をまとめる話し合い活動の基本的な進め方などについて理解している。(知識・理解) 【観察】 <ul style="list-style-type: none"> 提案理由を意識した発言など、よかったところを称賛する。

4 成果と課題

【成果】

- ・考察文の書き方が定着し、レベルアップ会議を充実させることができた。自分たちの言葉で短時間で話し合いが進められるようになり、その分、実験に時間がかけられるようになってきた。
- ・学級会の流れが理解され、進んで意見を言うことができるようになってきた。

【課題】

- ・話し合い活動は充実してきたが、個々に見ていくと発言の声が小さかったり、意見をつなぐことまでできていないので個別の支援をしていく必要がある。
- ・温かい学級集団作りをさらに進めていくことが必要である。

「子どもがうれしくなる国語科指導」

～伝え合い 深め 表現する～

川越市立新宿小学校

研究のポイント

- 授業において単元にふさわしい言語活動を構成する。
- 児童が、伝え合い深めることができるよう、効果的に新グループ学習を取り入れる。
- 「物語文」を通して①自分の考えをもつ、②自分の考えを書く、③自分の考えをグループで交流する、④ふり返るという学習過程を基本とし、児童一人一人が「叙述に即して読む」ことができるよう研究を行う。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

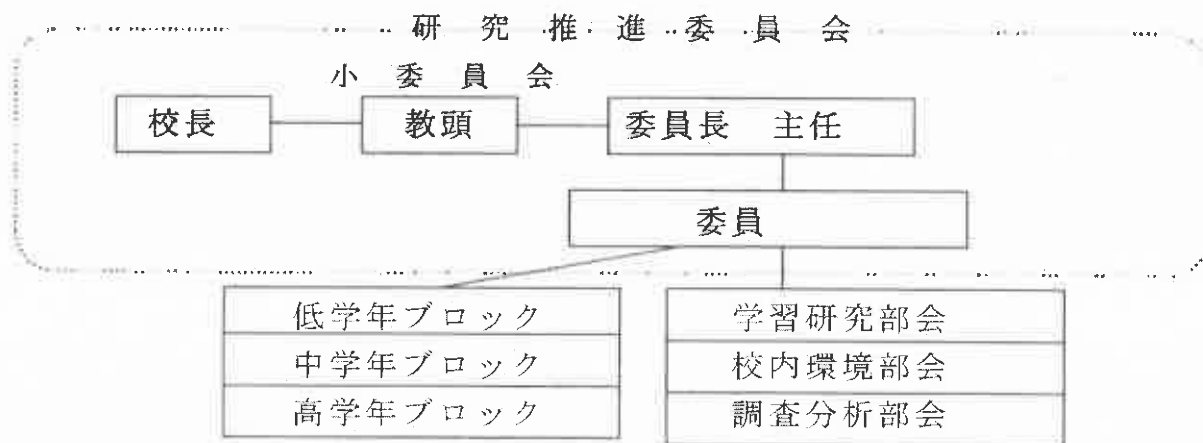
子どもたちが意欲的に自らの考えを表現できるように、単元構成を工夫する。また、効果的なグループ学習を取り入れることにより、児童一人一人が伝え合い深めることができるようにする。

(2) 研究主題設定の理由

本校の児童は、熱心に読書をしている児童がいるものの、長文の読解や文字を読むことに抵抗を感じる児童も少なくない。また、自分の考えに自信がもてず、発表に消極的な児童も見られる。

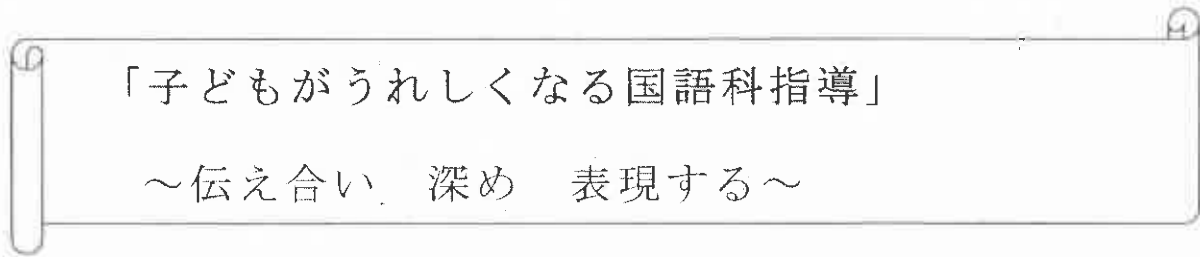
そこで、「物語文」の学習を通して、①自分の考えをもつ、②自分の考えを書く、③自分の考えをグループで交流する、④ふり返るという学習を多く取り入れることで、児童一人一人が、「叙述に即して読む」ことができるようになると考え主題を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容

(1) 研究の主な手立て



目指す児童像

ブロック	観点	目指す児童像
低学年	伝え合う	考えたことを進んで発表し合いそれらを聞いて感想を言うことができる。
	深める	自分の意見と、友だちの意見を比べることができる。
	表現する	自分の考えを、進んで話したり、書いたりできる。
中学年	伝え合う	筋道を立てて話すことができる。話の中心に気を付けて聞くことができる。
	深める	より良い考え方の相違点や共通点に気付き、自分の意見をまとめることができる。
	表現する	考えを、相手や目的に応じて話したり書いたりできる。
高学年	伝え合う	的確に話すことができる。相手の意図をつかみながら聞くことができる。
	深める	考えを、修正したり、より良いものに気付いたりして、確かなものにすることができる。
	表現する	考えを、目的や意図に応じて話したり、書いたりできる。

仮説1

効果的なグループ学習をすれば、伝え合い深めることができるであろう。

視点

- ① グループ学習における5つの原則
(相互協力関係・対面的積極的相互作用・個人の責任・社会的スキル・グループ改善の手続き)
- ② グループ学習の評価

仮説2

単元にふさわしい言語活動を構成すれば、子どもたちは意欲的に自らの考えを表現できるであろう。

視点

- ① 児童の実態
- ② 単元で身に付けさせたい力
- ③ 教材、学習内容の系統性

(2) 研究授業の実施

①低学年ブロック

日時 平成26年11月11日(火) 第5校時

学年 第1学年

単元名・教材名 こえにだしてよもう「くじらぐも」

②中学年ブロック

日時 平成26年10月28日(火) 第5校時

学年 第3学年

単元名・教材名 天国に行ったちいちゃんへのメッセージ集をつくろう
「ちいちゃんのかげおくり」

③高学年ブロック

日時 平成26年10月30日(木) 第5校時

学年 第5学年

単元名・教材名 本のショーウインドウで伝えよう！
椋鳩十作品の魅力「大造じいさんとガン」

(3) 校内研修の実施

日時 平成26年8月18日(月)

講師 木田正美先生 川越市教育委員会

演題 「子どもがうれしくなる国語科指導」

～国語教育における不易と流行～

3 実践事例

(1) 指導案の本時の展開で、学校研究の視点をどのように位置付けているか意識化・可視化する。

学習活動	学習内容	○指導・援助と評価の工夫	時間
グループ学習 質疑応答			
1 前時の学習を振り返る。		○3の場面までのワタルを振り返る。	7
2 本時の学習課題を確認する。	○学習課題の確認		1
3 4の場面のワタルの気持ちを表現している言葉を探す。 「目をぱちぱちさせた。」 「密たろ、だれだ。」 「ぜったいくるからね。」 「せなかか、ほくたかかった。」 「のぼりはじめたが、ワタルのかとたいた。」	○心情を表す言葉のさがし方	○様子を表す言葉に各自させる。 ○本文の叙述から主人公の表情や情景をつかませる。	10
4 4の場面のワタルの気持ちについて自分の考えをもつ。		ホワイトボードの活用	5
5 ワタルがどのように変容したのか、自分の考えを持ち、グループで交流する。	○グループでの考えの交流の仕方	○グループのメンバー全員がしっかりと自分の考えを交流できるように副会は「副会カード」を使用するなど話し合いの仕方を示す。 ○自分の考えが記述できていないグループを中心に質問を繰り返す。	10

学習活動の中に場の設定をし、わかるようにする。

例では、ここに場の設定をしています。(グループ学習)

仮説1：1単位時間の中で最も課題に迫る学習活動にグループ学習の場を設定する。

※指導計画上では、 で表す。

仮説2：単元を貫いて言語活動を設定する。

※指導計画上では、 で表す。

(2) 単元を貫く言語活動を位置付けた授業を意識する。

授業モデル



(3) グループ学習を充実する。

① ジョンソン&ジョンソンの5つの原則を意識し、グループ学習を行う。

- ・ 相互協力関係
- ・ 対面的積極的相互作用
- ・ 個人の責任
- ・ 社会的スキル
- ・ グループ改善の手続き

② 場を工夫する。

- ・ グループに1つずつミニホワイトボードを用意する。
- ・ 友だちと交流する場面では、付箋を活用する。



4 研究の成果と課題

【成果】

- ・ 研修を通じて、どの教師も単元にふさわしい言語活動を構成した国語の授業を実践できるようになりつつある。
- ・ 単元にふさわしい言語活動を構成した授業により、児童の文章の見方や考え方が広がった。また、並行読書により、作者の作品の中にある言葉の美しさや魅力に触れ、読書量が増え、読書生活を豊かにするきっかけとなった。
- ・ グループ活動活発に行われることにより、友だちと意見の交流でき、自分の意見に自信をもって発表する様子が見られた。

【課題】

- ・ 新グループ学習での指導内容の系統性
- ・ 学習環境の整備
- ・ 研修の充実によるさらなる授業改善
- ・ 評価の工夫

研究主題

「自ら夢中で取り組む、運動好きな今成っ子の育成」
 ～仲間と豊かに関わり、笑顔と汗があふれる授業を目指して～

川越市立今成小学校

研究のポイント

- 体育の授業を通して、子どもたちの身体能力の向上を目指す。
- コミュニケーション能力を高めて児童相互のよりよい人間関係を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の「元気な子」を目指すためには、子どもたちの身体能力の向上を目指すとともに、コミュニケーション能力を高めて児童相互の人間関係をよりよいものにするのが大切であると考えた。その実践を進めていく上では「体育」の授業が望ましいと考え、取り組むこととした。

(2) 研究主題設定の理由

学校の周囲は、水田や住宅地に囲まれ、その中に学校があり、比較的運動をする環境が整っている。しかし、習い事や、遊び道具、遊び方の変化に伴い、運動する子どもとそうでない子どもの2極化傾向が進んでいる。

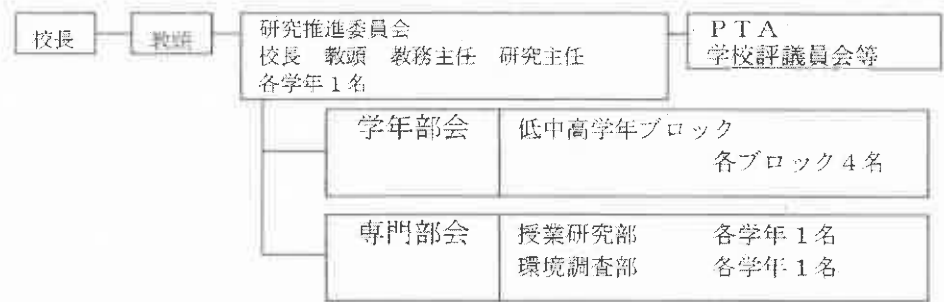
また、子どもたちを見ると、自分で考えて行動することを苦手としていたり、我慢強さが足りず、人とのコミュニケーションの未熟さから、トラブルになったりする児童もいる。

本研究では、学校教育目標の一つである「元気な子」の実現を目指し、運動の楽しさを味わわせ、子どもたちの運動技能や体力を向上させること、また、運動の習熟を図るために、互いに学び合うことで、人との関わりや自主性を養うことを目的

にしている。そこで、研究主題を「自ら夢中で取り組む、運動好きな今成っ子の育成」、副題を「～仲間と豊かに関わり、笑顔と汗があふれる授業を目指して～」として設定した。



(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 目指す児童像

自ら夢中で取り組む、運動好きな児童

低学年 友だちと進んで運動できる児童

中学年 仲間のよさを認め合う、運動好きな児童

高学年 仲間とともに学び合い、自ら考えて行動する児童

(2) 仮説と手立て

仮説 1

基礎的・基本的な技能を身に付けさせ、できる喜びを味わわすことできれば、運動が好きになるであろう。

手立て

- ①技能分析によるポイントの明確化
- ②教具の工夫
- ③児童が段階的に学習できる学習過程の工夫

仮説 2

仲間との関わり合いを豊かにした、運動の習熟を図れば運動が好きになるであろう。

手立て

- ①相互評価の充実
- ②学習形態の工夫

(3) 授業のねらい

やって楽しく、わかってできる体育の授業の実践のために、本校における体育の授業においては、「知・徳・体」のバランスのとれた授業を目指すことが大切であると考えている。それは、①やって楽しい（かかわり合い、楽しく運動する力[徳]）②わかること（運動の仕方を理解する力[知]）③できる（身体能力[体]）のバランスのとれた授業を目指すということである。それが、「自ら進んで取り組む、運動好きな今成っ子の育成」につながると考えている。

(4) 授業実践の視点

体育の授業の実践を進めるにあたり、以下のような授業の観点を取り入れて授業を展開することが大切であると考えている。

夢中で……………子どもが自分のめあてに向かって、何度も繰り返し、練習に取り組む授業

豊かな関わり……………互いを認め、補助や学び合いを通して、心の面での信頼関係を築ける授業

笑顔があふれる授業…わかること、できることから得られる心の充足感を得られる授業

汗があふれる……………児童が自ら活動し、豊富な運動量が確保された授業

3 実践事例

(1) 専門部会の実践

①授業研究部

ア 年間指導計画の作成・改善

イ 指導案検討

ウ 授業の流れ

エ 運動の系統性分析

オ 体育の約束、学習規律の統一

年間6回の授業研究会…指導者を招聘し、「走り幅跳び」、「ボールゲーム（ベースボール型）」、「ボールけりゲーム」の授業研究会を行った。それぞれ、高学年、中学年、低学年で実施し、系統性を重視した。「系統表」「慣れの運動例」なども作成し共通理解を図ることができた。



低学年 ボールけりゲーム



中学年 ボールゲーム（ベースボール型）



高学年 走り幅跳び

②調査環境部

ア 教材・教具の整備

イ アンケート実施、集計

ウ 掲示物の作成

エ 体育教材・教具の活用

「階段型踏切板」「得点表」「なわとびジャンプ台」など継続して活用できる教具を作成することができた。

☆階段踏み切り☆



リズムよく踏み切れるようになりました。

☆掲示板☆



掲示板を6台作成しました。たくさんの掲示物が見やすくなりました。

☆得点板☆

得点板で、ゲームの得点がわかりやすくなりました。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・研究授業を通して、児童の技能が高まる実践に、職員も楽しく取り組むことができた。
- ・運動が嫌いだと答えていた児童が体育科の授業を通して運動が好きと答えるようになった。
- ・単元構成や一単位時間の授業の流れ等を明確にして取り組んだため、職員の指導技術が向上した。
- ・仲間と関わる場面を設けたことで、他の授業や活動でも児童の関わりが見られるようになった。
- ・外で遊ぶ児童が、低学年を中心に増えた。

(2) 課題

- ・新体力テストの結果から、ボール投げ（投力）に課題がみられる。授業の充実、体力をアップさせる（高める）教材・教具の工夫などが今後の課題である。
- ・運動の技能分析を深め、意図的な授業づくりをしていきたい。
- ・児童の関わりについては、技能と同様に系統立てて指導し、確実な力を組織的に向上させていきたい。
- ・職員の実技指導については、研修の時間だけでなく、学び合う機会を設けて学習する必要がある。

研究主題

「主体的に活動できる心豊かな児童の育成」
～認め合い、高め合う学級活動を通して～

川越市立牛子小学校

研究のポイント

- 認め合い、高め合う話合い【指導の工夫】
- 主体的に活動できる環境【環境整備】
- よりよい生活づくりを目指す評価【工夫・改善】

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

子どもたちの人間関係を構築する力やコミュニケーション能力の向上が学校課題として挙がってきた。そこで研究のねらいとして、以下のような目指す児童像を掲げ、研究をスタートさせた。

- ① 自分の思いや考えを進んで伝えようとする子
- ② 友だちの考えを理解しようと真剣に問ける子
- ③ 協力し合って意欲的に活動できる子

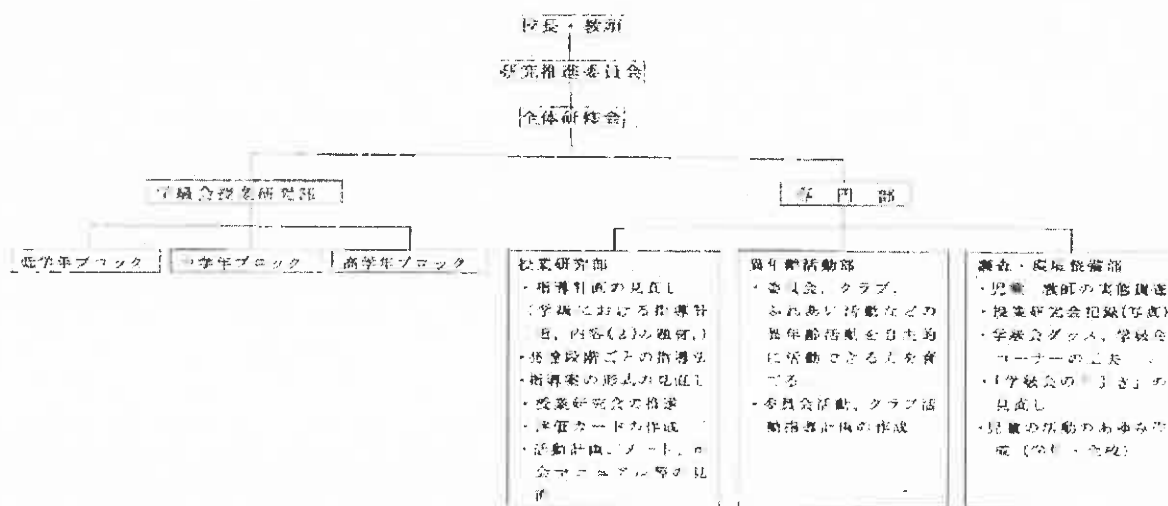
(2) 研究主題設定理由

本校では2年前まで算数科の学校研究で学力の定着に向けて成果を上げてきた。しかし、児童の語彙力の乏しさから、言葉足らずで様々なトラブルに発展することも見受けられた。学力向上にも繋がる児童の意欲ややる気を引き出すことや子ども同士の豊かな人間関係を築くため、学級での話合い活動が必要になってきた。そこで、

- ① 児童自ら関わるための特別活動（学級会）の学校研究推進
- ② 児童会や高学年の意識を高め、児童自ら取り組む活動の推進

と、目指す児童像に向けた取組のため、研究主題を「主体的に活動できる心豊かな児童の育成」、副題として～認め合い、高め合う学級活動を通して～と設定し、実践に向けた目標を目指した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 授業実践にむけて低中高学年の目標

目指す 児童像	友達の考えを理解しよう と真剣に聞ける子	自分の思いや考えを 進んで伝えようとする子	協力し合って 意欲的に活動できる子
低学年	話をしている人を見て最後 まで聞くことができる	自分の意見を進んで発表 することができる	友だちと仲良く活動で きる
中学年	(話をしている人を見て) 自分の考えと比べながら 聞くことができる	よりよい学級生活を目指 し、自分の考えと友達の考 えを関連付けて意欲的に 発表することができる	自分の役割を意識して 友だちと協力して活動 できる
高学年	友だちの考えを理解し、 よさや問題点を明確にし て聞くことができる	よりよい学校・学級生活 を目指し、自分の考えを積極 的に伝えることができる	互いのよさを認め合い めあてに向かって進ん で活動できる

(2) 研究のねらいについての手立て

① 認め合い、高め合う話合い【指導の工夫】

○教師

- ・学級会の進め方の基礎基本について、共通理解を図る（年度当初…公開授業、特別活動を生かした学級経営の進め方の研修）

○事前

- ・学級の目指す姿，活動の目標を明確にし、提案理由を練り上げ、一人一人のものにする《聞く・話す》
- （「黄金の3日間」の指導、学級目標を意識させた提案理由、事前の丁寧な提案理由の説明、学級会ノートの活用等）
- ・よりよい議題を選定し、話合いの柱の立て方を工夫する《意欲的な活動》
- ・発達段階に応じた計画委員会の指導《意欲的な活動》
- （高学年…実践までの見通しを持った話合いが進められるような活動計画の作成）

○本時

- ・時間内に合意形成を図り、即実践できる話合いをする（話合いのパターンを理解する）

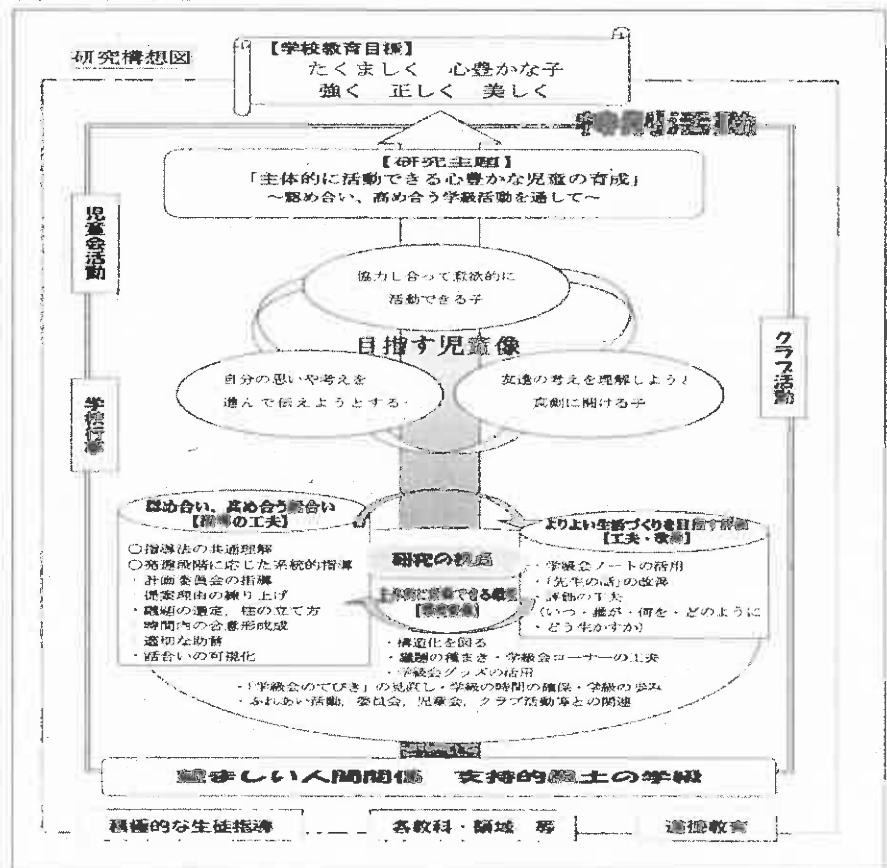
《話す・聞く》

- ・視点を明確に話し合うために、操作化して意見を分類・整理する。また、話合いの視点や思考を可視化する。《話す・意欲的な活動》
- ・適切な助言を行う。《話す・聞く・意欲的な活動》（発達段階を考慮，終末の教師の言葉）

② 主体的に活動できる環境【環境整備】

- ・学級経営と関連付けた学級会を行う（構造化）

(3) 研究構想図



<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容(2)、学校行事との関連を図る(議題の種まき) ・学級会コーナーの工夫、学級会グッズの活用 ・「学級会のとびき」の見直し ・学級の時間の確保 ・ふれあい活動、委員会、児童会、クラブ活動等との関連を図る ・話し合う力の育成(国語を中心に、お話タイム)
<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感、自己有用感を高める言語活動(書く)による評価の工夫 ・活動過程や成果を互いに認め合う場の設定 ・事前から事後までの変容を見取り、励ます評価の工夫 ・学級会のあゆみや学級のあゆみなどで集団の成長を可視化する
<p>③ よりよい生活づくりを目指す評価【工夫・改善】</p> <p>○話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級会ノートの活用を工夫する(話し合いの自己評価、集団の評価) ・「教師の話」を工夫する(評価のポイント、課題を明確にする) ・評価を蓄積し、集団の変容と個人の変容を見取る <p>○実践活動</p>

3 実践事例

(1) 6年4組学級活動指導案(抜粋)

- ① 議題 「みんな仲間だ!お宝みつけカルタ」を作ろう
- ② 児童の実態と議題選定の理由
- ③ テーマに迫るための手立て
- ④ 評価の観点と評価規準

集団活動や生活への関心・意欲・態度	集団の一員としての思考・判断・実践	集団活動や生活についての知識・理解
学級や学校生活の充実と向上にかかわる問題に関心を持ち、他の児童と協力して自主的に集団活動に取り組もうとしている。	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために話し合い、自己の役割や責任、集団としてのよりよい方法などについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。	みんなで楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることの意義や、学級集団としての意見をまとめる話し合いの効率的な進め方などについて理解している。
<p>童 目 指 す 児 童 の 姿</p>	<p>《事前の活動》・めあてを考え、提案理由に沿った意見やその理由を書くことができる。</p> <p>《本時の活動》・提案理由や話し合いのめあてに沿って自分の考えを発言している。</p> <p>《事後の活動》・決定したことや自他の役割を考え、協力して実践している。</p>	

- ⑤ 事前の活動 11/21より学級会に向けて活動を開始
- ⑥ 本時のねらい
 - クラスの思い出を大切にし、一人一人のよさを生かしたかるた作りの計画を立てることができる。
- ⑦ 展開(活動計画)
- ⑧ 指導上の留意点

話し合いの順序	指導上の留意点◎目指す児童像(評価の観点)【評価方法】
1 はじめの言葉	・明るい雰囲気話し合えるよう、笑顔で見守る。
2 計画委員の紹介	・計画委員の児童には自分の役割についてのめあてを発表させ、役割意識を持たせるようにする。
3 議題の確認	・提案者の思いや願いを考え、学級全員の問題であることが分かるようにする。
4 提案理由の確認	・掲示資料等を活用することで全員が理解し、話し合いの指針となるようにする。
5 願いの発表	

6 話合いのめあての確認

7 話し合うことの確認

8 決まっていることの確認

9 話し合い

10 決まったことの確認

11 振り返り

12 先生の話

13 おわりの言葉

・事前に声を掛けておいた三名に願いを発表させ、話し合いへの全体の意識を高める。

【決まっていること】

・クラス1人1人の良いところの札 (33枚)

…くじでペアを決め、お互いに札を書き合う。

・クラスの思い出の札 (8枚)

①運動会②修学旅行③音楽会④クラスの歌⑤クラスのマーク⑥6年4組のスタート⑦1年生との集会⑧バスケットボール大会

・クラスの良いところの札 (5枚) を決める。

・かるたは画用紙の8分の1の大きさ。 他5つ

◎自分の考えと比べながら友だちの発表を聞いたり、理由を明確にして自分の意見をいったりして、協力し合って話し合いを進めることができる。(思考・判断・実践) 【観察】

⑨ 事後の確認 12/5

4 研究の成果と課題

(1) 成果

① 年度当初から特別活動を基盤とした学級経営について職員会議で共通理解を図り、学級会コーナーや学級会グッズなどを整え、学級の目あてや係の組織の仕方等について、同一歩調で指導に当たることができた。

② 『何のために話し合うのか。』『自分たちの目指すものは何か。』を常に意識して学校行事や学級の活動に取り組む姿勢が、児童にも教師にも定着してきた。

③ 昨年に引き続き全クラス学級会を公開し研究授業を行ったことで、常に提案理由を大切に学級会が展開され、児童は学級会の進め方をより確かに理解できるようになり、教師も学級の実態や発達段階に即した指導方法を心掛けるようになった。

④ “実践のための話し合い”であることを常に意識して学級会を行い、1時間の中で“決めきる”ことができるようになってきた。

⑤ コミュニケーション能力が少しずつ高まり、学級会では友達の見解に関連させた発言が増えてきている。

⑥ 『事前の活動、話し合い、実践、振り返り』という一連の活動を通して、目標に向かって1つになって活動する充実感や達成感などを味わうことができ、学校・学級内に望ましい人間関係が醸成されるようになった。それにより友達のよさを認め合い、学び合って高め合う姿勢が生まれ、学習意欲も向上した。各種学力調査の結果も、昨年度今年度と研究を始めてから向上している。

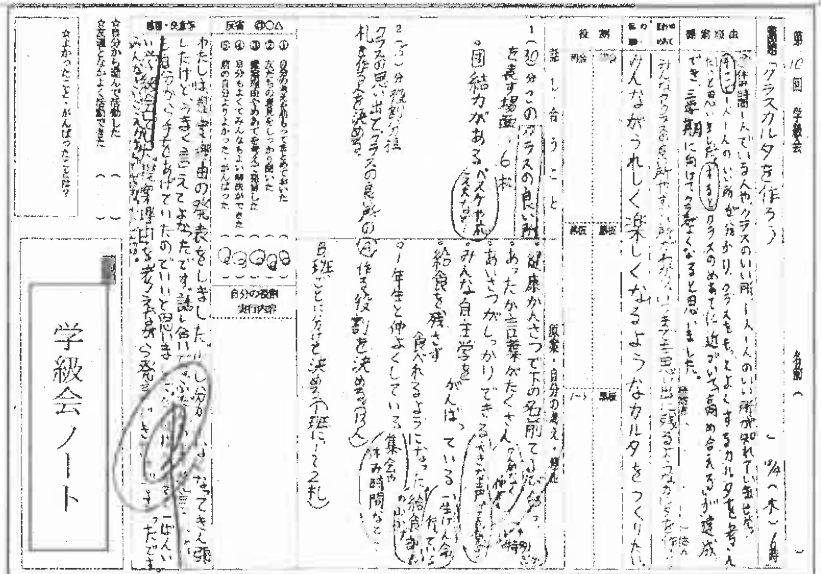
(2) 課題

① 計画委員会を開く時間を日課表の中に位置づけたが、効率のよい指導方法や時間の更なる確保について検討したい。

② 時間内で決めきる話し合いをめざし、効率化を図るための手立てを黒板の可視化・構造化・原案の提示の仕方等から工夫していきたい。

③ 研究授業のまとめが周知されず、次回に生かされないこともあったので、しっかりとまとめをし、共通理解を図って、研修を深められるようにしていきたい。

④ アンケートによる学級会への意識調査によって、集団の変容は見取ることができたが、それだけで十分なのだろうか。個の変容はどう蓄積していくのか、さらに研究を深めたい。



研究主題

「人とのかかわりを大切にし、よりよく生きようとする子どもの育成」 ～道徳的実践力を高める指導法の工夫～

川越市立高階小学校

研究のポイント

- 指導案に「発問・指示・説明」「研究主題と本時との関連」「他の教育活動と本時との関連」を表記することで、ねらいの達成への手立てを明確にし、その達成に迫った。
- ねらいとする道徳的価値について考えを深めさせるために、ワークシート等を活用し、「書く活動」を積極的に取り入れた。
- 場面発問で主人公の心情に迫り、判断、行為の理由などを問うた。また、テーマ発問で自分自身の考えを個々に発表させることで、主題に関わらせた。
- 毎月第4月曜日の「こころの日」（業前）に、教師の指導（5分）・児童の学習活動（10分）の中で「私たちの道徳」を読み自分の考えを書き込む等の時間を設定した。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

道徳教育は学校の教育活動全体を通して行うべきものであるが、特にその中心となる道徳の授業の指導法の工夫と授業改善を図ることにより、児童一人一人が自己の生き方について考えを深め、人としてよりよく生きようとする道徳的実践力を身に付けることができると考え研究に取り組んだ。

また、教科の特性に応じたコミュニケーション活動や体験活動を計画的に進め、人とのかかわり方を身に付け、人との関わりを大切により良く生きようとする児童の育成を研究主題とした。

- ① 「発問・指示・説明」を指導案に明記したり、指導法を共通理解・共通行動したりすることで、校内での研究を深め教師一人一人の指導力の向上を目指した。
- ② 場面発問やテーマ発問等の発問や、ワークシート等を工夫し「書く活動」を積極的に行わせることで、児童個々にねらいとする道徳的価値に気付かせる。
- ③ 様々な教科で、グループ学習や体験活動を積極的に行い、人との関わり方を身に付けさせる。

(2) 研究主題設定理由

近年、児童を取り巻く環境が大きく変化し、確かな学力はもちろん、豊かな心を育むことがますます重要になってきている。豊かな心の育成は道徳教育を中心とした全ての教育活動を通して行わなければならない。

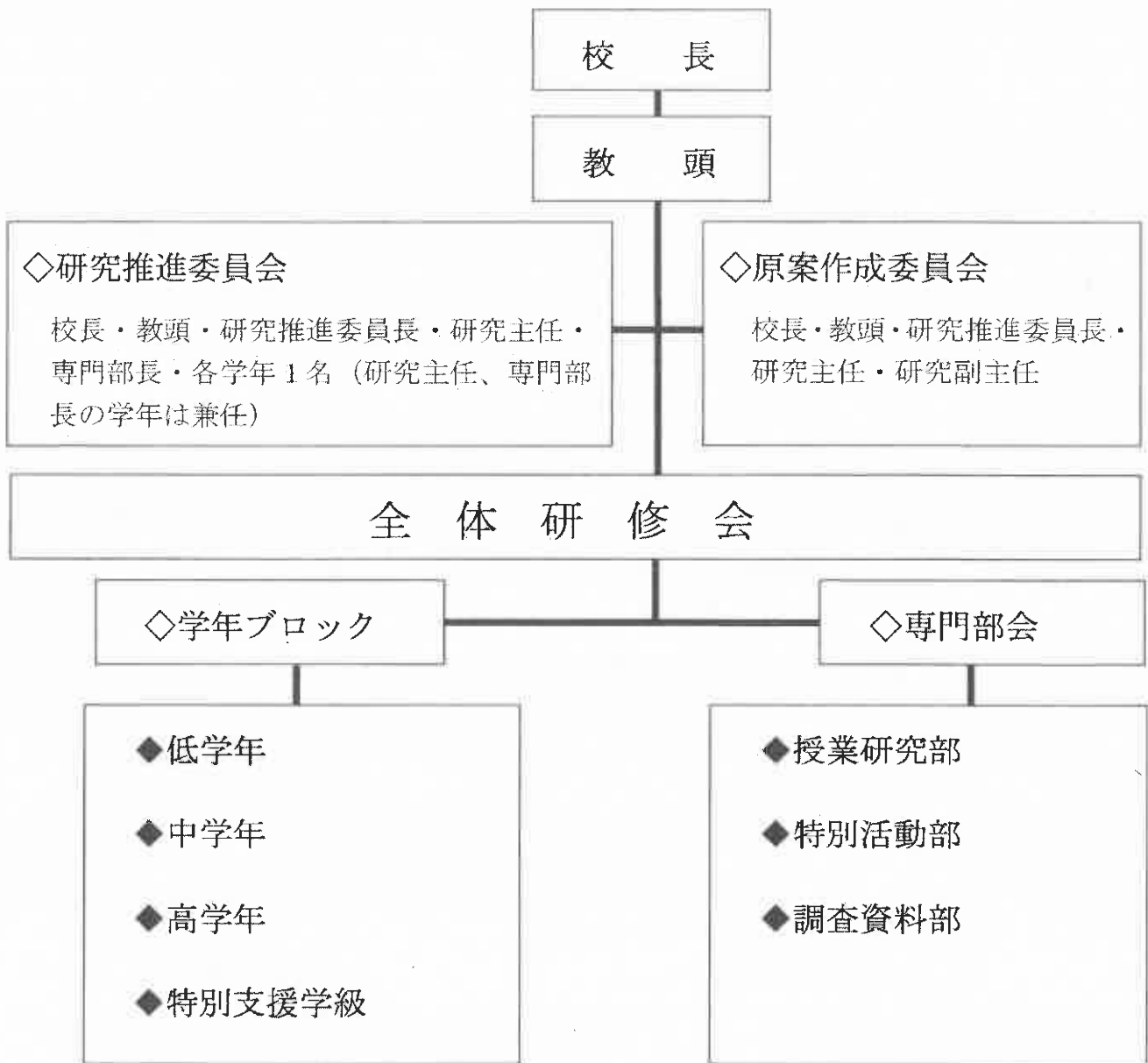
本校児童の実態として「自己中心的で、相手を思いやる心が欠ける」「自分の気持ちや考えを言葉で伝えることが苦手」等が挙げられる。そのため道徳の授業を中心とした、道徳教育を一層充実させる必要があると考え本主題を設定した。

目指す児童像の実現に向け、「道徳」授業を一層推進させるために、指導法の工夫改善を図ることで、児童一人一人に道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度を養うことができると考えた。

また、来年度は本校「道徳研究」の3年目にあたり、今まで以上にコミュニケーション能力の育成を図ることを目的として、特別活動の「学級活動」にも視点をあて、さらに特別支援教育の視点に立った指導法の工夫についても研究を進める予定である。

(3) 研究組織

＜平成26年度 高階小学校 学校研究組織＞



2 研究の内容と実践事例



(1) 指導案の工夫

- ① 発問・指示・説明を明確にし、指導案に表記した。また、指導方法例を示し、全体で確認することで指導法の統一を図った。
- ② 「研究主題と本時との関連」、「他の教育活動と本時との関連」を示し、それらに対する具体的な手立てを表記した。

<道徳の時間の指導方法例>

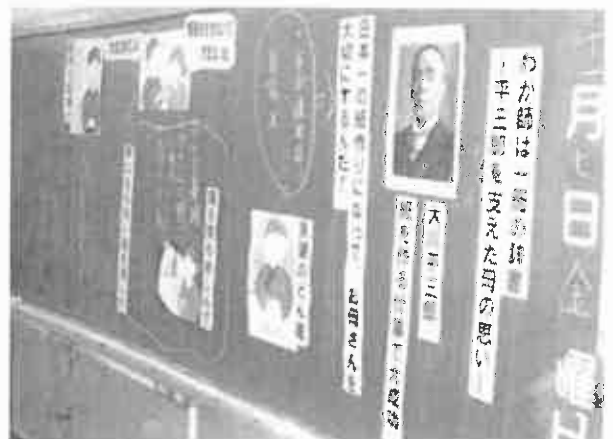
発問	せい六は、どのような気持ちで泣いている女の子の横を、知らないふりをしてそっと通りすぎたのでしょうか。	
説明	自分より大きい男の子3人に、通せんぼされて泣いている女の子を、木にかくれて見ていたせい六は、そのまま知らないふりをしてそっと通りすぎたのですよね。	
指示	手を挙げて発表しましょう。	
	<ul style="list-style-type: none"> 自分より大きい相手だから怖い。 相手は3人だから言えない。 やりかえされるかもしれない。 知らないふりをすれば、自分は助かる。 助けてあげたいけれど…怖い。 	<ul style="list-style-type: none"> 知らないふりをしようとした主人公の弱さに十分共感させる。 「助けよう」と思っていたせい六が、知らないふりをして“そっと”通り過ぎた心の変化を捉える。
発問	実際にみんなで「おい、弱い者いじめはよせよ。」と尝试してみよう。	
発問	せい六は、一度は通り過ぎたのに、なぜ「弱い者いじめはよせよ。」と思いついて言うことができたのでしょうか。	
説明	初めは、知らないふりをして通り過ぎたけれど、友だちが応援しているような気がしたのですよね。	
指示	実際にみんなで、「知らないふりをして通り過ぎ、「おい、弱い者いじめはよせよ。」と言ったせい六」になってみましょう。せい六の気持ちになって、ワークシートの吹き出しに書きましょう。	

<道徳の時間の指導方法例>

道徳の時間の指導方法例	
導入	<ul style="list-style-type: none"> 事前アンケートの実施 実体験の想起 資料に関するVTRの視聴 ねらいにかかわる新聞や雑誌の記事紹介 
展開	<ul style="list-style-type: none"> 資料提示の工夫(紙芝居、人形劇、ペープサート、VTR、再現構成法的手法) 座席配置の工夫(コの字型、Uの字型、机を使わない) 表現方法の工夫(役割演技、動作化、イラスト化、心情円盤、心情ピラミッド、ペープサート化) チームティーチング(TT) 話し合い活動の工夫 板書の工夫 発問の工夫(場面発問、テーマ発問) ワークシートに書く活動(主人公への手紙、自分の生活を振り返る)
終末	<ul style="list-style-type: none"> 教師の説話(体験、身近な話題) ゲストティーチャーの説話 ことわざ、詩、作文の紹介 歌を歌う 「私たちの道徳」 

(2) 資料提示、板書の工夫

- ① 児童の興味・関心を高めさせるため、PCやVTRを使った資料提示を行った。
- ② 黒板の掲示物にキーワードや場面絵を用いて、話の流れに沿った板書とした。



(3) 書く活動の工夫 (ワークシートの工夫)

自己の振り返りをする時や自分の経験に関連させて「書く活動」を行うことでねらいとする道徳的価値について考えを深めることができた。

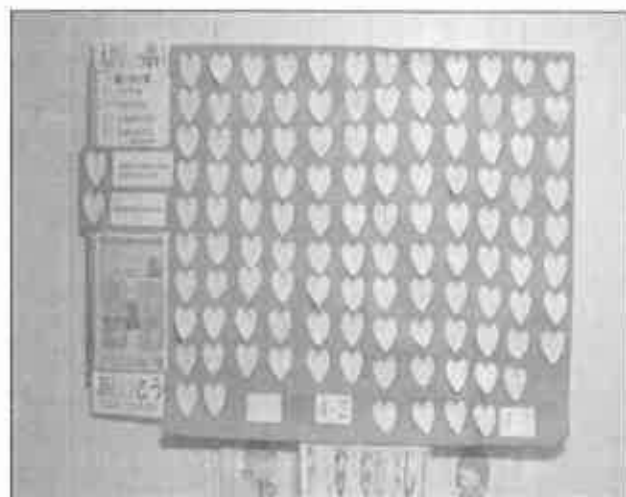
(4) 発問の工夫

場面発問で主人公の心情に迫り、判断、行為の理由などを必ず問うようにした。テーマ発問では、自分自身の考えを明確にさせることで、主題に関わらせた。

(5) 特別活動との関わり

「自分と友達を見つめるコーナー」を学年掲示板に設置した。

発問の工夫について	
場面発問	テーマ発問
資料中のある場面に関して、そこでの登場人物の心情や判断、行動の理由などを問うたり気づきを問うかにしたりする発問。	資料の主題やテーマそのものを中心に、かかわって、それを振り返ったり、追求したりする発問、「主題発問」ともいえる。
～のとき、〇〇の気持ちはどんなだろう。 ～のところで、〇〇はどう思っただろうか。 ～するときの心の中はどんなか、 主人公の心情に迫る	～にはどんな意味があるのか、 ・〇〇が大切にしていることは何だろう。 ～はどんなことが負担なのか、 ・それぞれの考えのちがいは何か、 自分自身の考えを主張させる



(6) 「こころの日」の設定

毎月第4月曜日の業前（15分）に、「私たちの道徳」を活用し、教師の指導（5分）児童の活動（10分）の展開で、児童が好きな頁をめくり、読んだり書き込んだりした。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 指導案に「発問・指示・説明」を明確に示すことで、より具体的な分析・検討ができるようになった。また、他の教員が授業を行う際に、一定のレベルの授業が展開できるようになった。
- ② 再現構成法的な手法を使い、主人公の心情を自分の経験と照らし合わせて考えさせることで、多様な意見や考えを引き出すことができた。
- ③ 中心発問を柱にしたワークシートを工夫することにより、児童が書く作業を通して、考えを深めることができた。また、書いたことを読むことで発表が苦手な子も発表ができるようになった。
- ④ 「友達のよい行動」を発表し合ったり、クラスやグループの話し合い活動を積極的に行ったりすることで、人との関わり方を身に付けることができた。

(2) 課題

- ① 全ての児童にとって「わかる」「できる」、自己肯定感を高めることを目指した特別支援教育の視点に立った指導法の研修を進めていく必要がある。
- ② ねらいとする道徳的価値について、児童の考えが二分するようなさらなる発問の工夫が必要である。また、教師と児童との対話で終わらせるのではなく、児童同士の対話、討論を行えるような指導の工夫が必要である。
- ③ 評価方法やその分析をどの様に行うか、個別に配慮を要する児童への関わり方等、指導案に明記すること等を含め具体的な対策の検討が必要である。
- ④ ねらいに沿った児童の多様な考えをさらに引き出すための「書く活動」の工夫（ワークシート等）をしていきたい。また、全員を参加させる指示の出し方等の指導法上の工夫も必要である。

「伝え合い、学び合う子どもの育成」
～国語科「読むこと」の指導を通して～

川越市立上戸小学校

— 研究のポイント —

- (1) 学習指導要領や参考文献等を基に、研究主題についての基本的な考え方を明らかにする。
- (2) 子ども及び教師を対象とした実態調査や意識調査などから、指導上の課題について明らかにする。
- (3) 指導事項等を基に、目的に応じて「読むこと」の能力を設定する順序及びその内容について明らかにする。
- (4) 目的に応じて「読むこと」の能力の育成に適した「単元を貫く言語活動」の内容や、指導過程への位置付け方について明らかにする。
- (5) 子どもの主体性を高め、目的に応じて「読むこと」の能力を育成するための具体的な指導の手立てについて明らかにする。
- (6) 検証授業の分析を基に、研究の成果と課題について明らかにする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 「単元を貫く言語活動」について系統性を見出し、年間の見通しをもって付けたい力に相応しい「単元を貫く言語活動」の選定をする。
- ② 第二次の学習において、「単元を貫く言語活動」を児童が意識できる手立ての工夫する。
- ③ 書く活動を深めるために、学習シートを多様化させることを通して様々な交流場面を設定する。
- ④ 音読の奨励と並行読書などを促進する読書環境の充実を図る。

(2) 研究主題設定理由

中央教育審議会答申には、学習指導要領の国語科改訂の趣旨として、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」を一層重視して国語科の授業改善を図ることが示されている。そのために、言語活動の充実に関する指導事例集では、学習指導要領の内容の(2)に示す言語活動例をもとに、具体的な言語活動を通して指導事項を指導することが大切であり、その際に、「ここで音読する」「ここで話し合う」といった活動ではなく、児童が自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、「単元を貫く言語活動」を位置付けることが必要であるとしている。

そこで、研究の領域を「読むこと」を文学的な文章にしぼり、身に付けさせたい力を定着させるための手立てを考えて、いかに授業の中に仕組んでいくかを明らかにした。このことから、文学的な文章を読む面白さを通して、文章から想像を広げながら

読みを深められると考えた。登場人物に同化し、感情移入をしながら読んだり、登場人物の行動や会話だけでなく描かれた情景を想像し、情景と人物の心情を関連付けながら読んだりする。文学的な文章は、場面が相互に関連しつつ一連のストーリーとして構成されており、場面の展開に即して出来事や登場人物の心情を読んでいくことは、作品理解の上で大切なことである。一つの場面だけをその前後と切り離して読むのではなく、相互に関連付けたり、登場人物の相互関係を捉え、それらに基づいて内面的な深い心情を捉えたり、さらに、他の作品や同じ題材の作品と結び付けて解釈したりすることで、より想像が広がり、読みを深めていくことができる。叙述を基に想像して読み、他の情報との比較や関連付けによって叙述からイメージを広げたり、読みを深めたりして自分の考えをもたせた。教師の授業改善から単元を通して児童に力をつけるための単元構想づくりの手立てを明らかにし、「単元を貫く言語活動」の充実を図る指導のあり方を深めることができた。

(3) 研究組織

① 各研究部 (研究推進委員長 町田 研究主任 小野寺 ◎部長 ○副部長)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	教務部
授業研究部	大橋	伊藤	◎金子	小島	○國本	八木	西宮
調査・環境部	行森 三浦	大野 齊藤香	田中	◎齋藤怜 阿部	○飯田	野口	飯野 原島

② 学年・ブロック部会 (○ブロック長)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
	行森	○伊藤	金子	小島	飯田	小野寺
	三浦	大野	田中	阿部	國本	野口
	大橋	齊藤香 飯野	○西宮	齋藤怜		○八木

2 研究の内容

(1) 単元構想 (第二次) 読みの学習の仕方を工夫

① 「単元を貫く言語活動」の工夫

「単元を貫く言語活動」は、「知りたい」「伝えたい」という児童の意欲を引き出す課題解決的な活動になるように設定した。その際、本単元で付けたい力を意識しながら、児童の興味・関心を引く名称にした。児童の「知りたい」「伝えたい」という意欲を生かした言語活動となるとともに、自分と友だちが共感したところを比べ合い、互いの違いに気付き、自分の考えを広げたり、深めたりすることにもつながると考えた。また、「単元を貫く言語活動」の他に、一単位時間における「話す」「聞く」「読む」「書く」の言語活動を工夫することで一人一人の考えを係わらせるようにした。

② 読みを深めるための交流

主体的な「読み」につながる手立ての一つとして「交流」を取り入れた授業実践を行うことで、自分の読みの根拠を交流の中で明らかにし、叙述に即して読むことを通して、児童一人一人が自らの思いを豊かにし、その思いを伝え合うことや読みを深め

ることができる。児童の交流による学び合いの中には、読み手主体の読みの深まりがあるので、一人一人の読みを成立させる。また、系統的に読みを深化・拡充させていける。

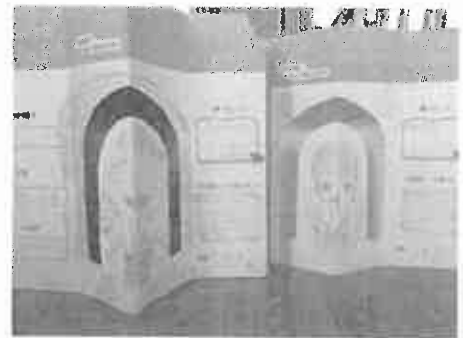
- ③ 文学的な文章における指導では、教科書を読むことが中心となる第二次においても、「単元を貫く言語活動」と切り離して教材を読み取らせるのではなく、常に第三次との関連性を子ども自身が十分に意識できるようにする。

3 実践事例

- ① 1年「くじらぐも」言語活動・場面と人物の様子を思い浮かべて音読劇をしよう。

ア「単元を貫く言語活動」とその特徴

「単元を貫く言語活動」として、「音読劇で演じる」ことを位置付けた。自分の好きな場面について、登場人物の様子を思い浮かべて、感じたことや想像したことを音読や動作化で表現し発表する。本単元でねらう「場面の様子について 登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」(C読むことウ)を実現させる取組を行う。




イ 単元構成と言語活動

第一次 (第1時)	第二次 (第2時~第6時)	第三次 (第7時~第11時)
<p>1 音読劇を聞き、課題意識をもつ。</p> <p>(1) 音読劇を聞き、感想を話し合う。</p> <p>(2) 「くじらぐも」を読み、好きな場面を音読劇で演じるために学習計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「くじらぐも」の読み聞かせを聞く。 ・「くじらぐも」を音読し、好きな場面を見付ける。 <p>(3) 昔話を読んで、好きな話の音読劇をする課題を知る。</p>	<p>2 物語の感動した場面や好きな場面を見付けて読む。</p> <p>(1) 音読劇をすることを意識して繰り返し音読し、好きな場面を2~3か所選ぶ。</p> <p>(2) 好きな場面を繰り返し音読し、1か所にしぼる。</p> <p>(3) 一番好きな場面を音読し、選んだわけを書く。</p> <p>(4) 好きな場面を紹介し合う。</p> <p>選んだわけと好きな場面を音読し、紹介し合う。</p> <p>(5) 同じ場面を選んだ人でグループを作り、音読劇の練習をする。</p> <p>(6) 「くじらぐも」の音読劇の発表をする。</p>	<p>3 好きな話の音読劇をする。</p> <p>(1) 昔話を読み、好きな話を選ぶ。</p> <p>(2) 同じ話を選んだ人でグループを作り、音読劇の計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの場面を音読劇にするか。 ・役割分担をする。 ・音読練習をする。 <p>(3) 音読劇の発表会をする。</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 20px;"></div> <div>並行読書(文学的な文章)</div> <div style="font-size: 2em;">➤</div> </div>		

② 5年「大造じいさんとがん」言語活動・椋鳩十の作品を紹介しよう。

ア「単元を貫く言語活動」とその特徴

「単元を貫く言語活動」として「自分の語りを作り、朗読CDで全校児童に紹介する」ことを位置付けた。朗読CDには椋鳩十の作品の中から自分で選んだ作品のクライマックス部分の朗読CDを作成する。語りとして、あらすじ、登場人物の相互関係、情景描写、クライマックスについて自分の考えをまとめ、朗読CDの作成に生かした取組を行う。

第一次（第1時）	第二次（第2～6時）	イ 単元構成と言語活動 第三次（第7～9時）
<p>1 本の紹介の仕方について知り、学習のめあてをもつ。</p> <p>(1)朗読CDを聞き、朗読について知る。</p> <p>(2)朗読CDを作るために必要なことを話し合う。</p> <p>(3)学習計画を立てる。</p> <p>(4)椋鳩十の作品の並行読書を知ることを知る。</p>	<p>2 教材文「大造じいさんとがん」を読み、紹介文の各項目を書く。</p> <p>(1)「大造じいさんとガン」を音読する。 構成を捉える。</p> <p>(2)あらすじをつかむ。 場面毎に自分なりの題名を付ける。</p> <p>(3)大造じいさんと残雪の相互関係について読み取る。</p> <p>(4)情景描写について自分なりの考えを持つ。</p> <p>(5)自分の語り「大造じいさんとガン」(朗読CD)。</p>	<p>3 並行読書で読んだ中から作品を選び紹介する。第二次で学んだことを生かしながら自分が選んだ作品を読み、表現する。作品の魅力を紹介し合う。</p> <p>(1)選んだ本についての自分の語りをつくる。</p> <p>(2)同一作品を選んだ同士で交流し合う。</p> <p>(3)自分の語りを朗読CDに録音する。</p>
<p>朗読CDで自分の語りを作成しよう </p>		

4 研究の成果(○)と課題(◇)

○ 児童の「お気に入り」「なるほど」を中心に据えた第二次の学習を展開するとともに、授業の導入や終末に「単元を貫く言語活動」との関わりを取り扱うことにより、学習への興味や関心が高まり、児童自らが見通しをもって主体的に学習に取り組もうとする姿勢が見られるようになってきた。

◇ 単元構成を考える際に、第三次につながるための第二次の内容が、詳細な読み取りに陥りがちである。単元のねらいや指導事項を意識し、第三次につながる授業内容を考えていく必要がある。



「生徒のよさを活かし、伸ばす指導法の工夫」

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

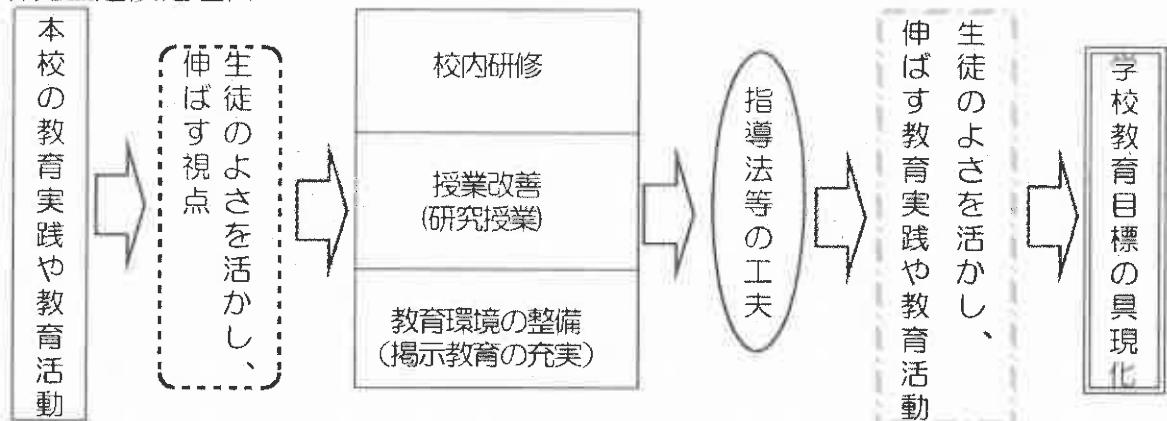
- ① 本校生徒の「よさ」を共通理解し、授業実践を通して指導法の改善を研究する。
- ② 既存の組織や分掌、教育活動や実践を生かし、組織的かつ効率的に研究を進める。
- ③ 特に校内研修、授業改善、教育環境の整備という3つの側面に視点を当てて改善と工夫を図り、教育実践や取組が生徒のよさをさらに伸ばすことをめざす。

1 研究の概要

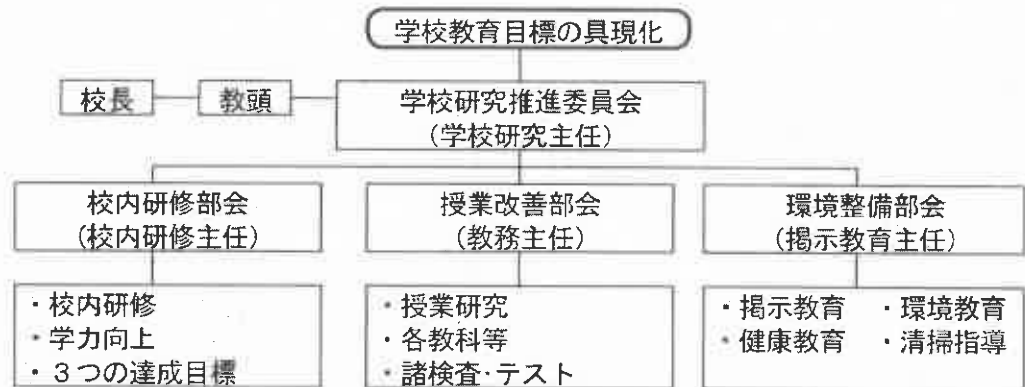
(1) 研究のねらい

これまで本校で日常的に実践してきた教育活動を、「生徒のよさを活かし、伸ばす」という視点に立ってさらに充実させ、学校教育目標の具現化を図る。

(2) 研究主題設定理由



(3) 研究組織



※校務分掌をそのまま研究組織に位置付け、全職員が学校研究に関わるようにした。

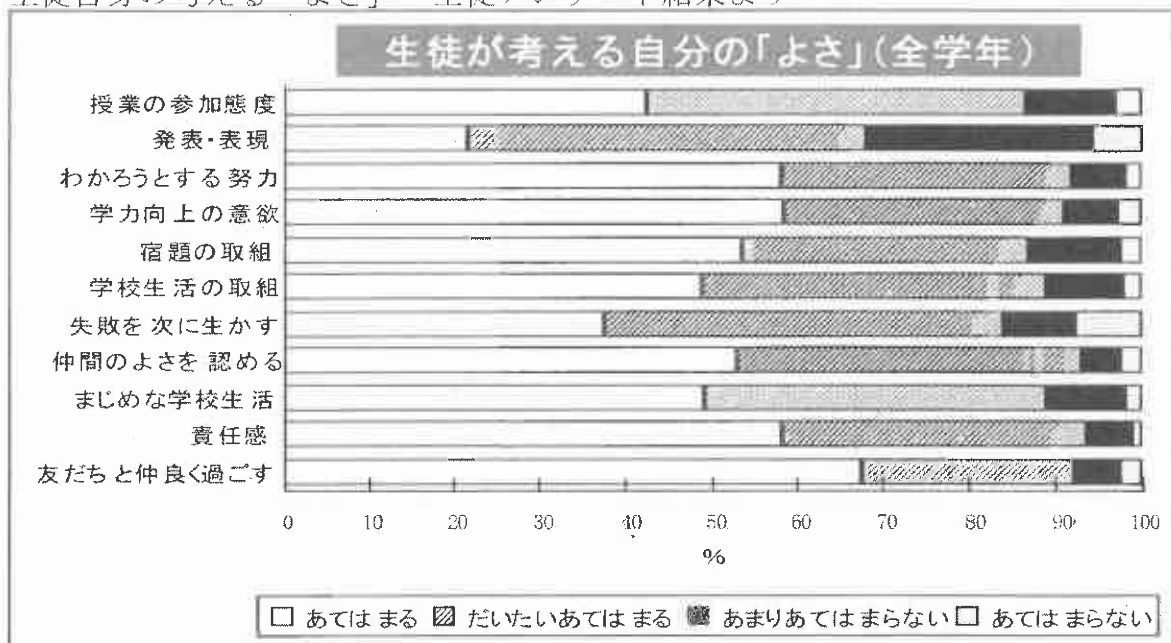
2 研究の内容

- (1) 学校研究の目的、基本方針、研究内容、研究推進体制等の共通理解
- (2) 生徒の実態調査と分析、研究を進める視点や具体的手立ての検討

① 本研究における生徒の「よさ」－教師アンケート結果（上位項目）より

今後も活かしたい「よさ」	今後さらに伸ばしたい「よさ」
<ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲や関心 ・集中力 ・向上心 ・素直さや真面目さ ・たくましさ ・公共心や正義感 	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って行動する、発表する ・自己表現・自己主張 ・創意工夫 ・コミュニケーション能力 ・積極性 ・自主性

② 生徒自身の考える「よさ」－生徒アンケート結果より



③ 生徒が好きな授業（複数回答 上位5項目）－生徒アンケート結果より

さまざまな作業や体験ができる授業	74.3%
グループでの話し合いなどが取り入れられている授業	37.1%
課題について個人やグループで調べる授業	35.5%
新聞やレポート、論文などで学習のまとめを行う授業	18.1%
調べたり話し合ったりしたことを発表する授業	10.2%

④ 研究を進める視点と具体的な手立て

今年度実施した実態調査結果の分析及び昨年度の実践や諸調査の結果を踏まえ、各教科部会で「自己表現力」や「学習意欲・関心」を中心とした本校生徒のよさに着目して、授業研究を通して指導法の工夫・改善を図ることとした。

(3) 学校研究との関連を図った校内研修内容を重点的に実施（後掲）

(4) 「生徒のよさを活かす」掲示教育の推進

- ① 生徒のすぐれた作品（グッドモデル）の掲示－生徒の活動が見える作品や記録等
- ② 生徒の特技を活かす掲示物作成－学校行事の垂れ幕やポスター等
- ③ 生徒のよさを伸ばすための掲示物による啓発－生活の向上や諸活動の充実等
- ④ 生徒のよさを支えるための掲示－学校・学年で規格を統一した掲示物



【各クラスの歴史新聞の掲示】



【生徒作品あふれる廊下壁面】



【各階踊り場の壁画】

(5) 今年度のまとめ－研究成果の検証と課題の明確化

3 実践事例

	月日(曜)	授業者	単元・題材	研究主題との関連	指導者
国語	10月1日(水) 第2校時 1年3組	横山友理	つながりを読む 「シカの『落ち穂拾い』－フィールドノートの記録から」	・自己表現力の向上 ・情報活用能力の育成	濱田彰博先生 (学校管理課主幹)

社会	10月8日(水) 第3校時 1年2組	野尻昌利	アジア州 「アジアでは急速な成長がどのように進んでいるか」	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いや発表を通しての自己表現力の向上 学習環境整備により学習意欲や関心を高める 	内野博紀先生 (芳野中校長)
音楽	10月10日(金) 第2校時 1年2組	福島聡太	「豊かな混声合唱の響きを味わおう」	<ul style="list-style-type: none"> リーダーを活かした授業 生徒の自己評価を活用した表現力の向上とお互いのよさの認め合い 	岡島一恵先生 (西部教育事務所指導主事)
美術	10月23日(木) 第2校時 3年4組	新堀晃香	平ひもで創る 「思い出の器、夢のかたち」	<ul style="list-style-type: none"> 意見交換による表現力向上 生徒の相互評価内容を活用した個別支援 	田中 晃先生 (大東西中教頭)
保健	10月29日(水) 第3校時 2年1,3,5組	鷺澤 誠	球技(ハンドボール)	<ul style="list-style-type: none"> 役割を持たせ、学習意欲や関心を高める。 生徒相互のよさの認め合い 	文屋芳浩先生 (山田中校長)
数学	11月26日(水) 第5校時 1年5組 ※川教研情報教育部授業研究会	原田浩明 吉武 洵	平面図形	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書の活用により、学習意欲や関心を高める。 考えを伝え合う活動を通しての表現力の向上 	駒井忠幸先生 (高階西中校長)
英語	12月16日(火) 第2校時 2年2組	與那嶺舞	POWER-UP Speaking 4 「道案内①」	<ul style="list-style-type: none"> グッドモデルを活用し学び合いを促し、意欲を高める。 会話活動の活性化 	粕谷英之先生 (教育センター指導主事)
技家	12月16日(火) 第2校時 1年4組	織田光代	「清涼飲料水を作って食品添加物を考えよう」	<ul style="list-style-type: none"> 実験を通して学習意欲や関心を高める。 家庭科学習と生活との関連 	福田和子先生 (教育センター主査)
理科	1月13日(火) 第5校時 2年1組 ※川教研理科部授業研究会	墨谷悦史	電気の世界	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程で、発展的に2段階のグループでの話し合い活動を設ける。 1回目の話し合い活動の成果を2回目に応用する。 	中村健二先生 (鯨井中校長)



【ニュースキャスターと感想発表】



【英語で道案内】



【プレゼンテーションソフトで説明】



【グループでの話し合い】



【身近な素材で実験】



【実験をもとにした話し合い】

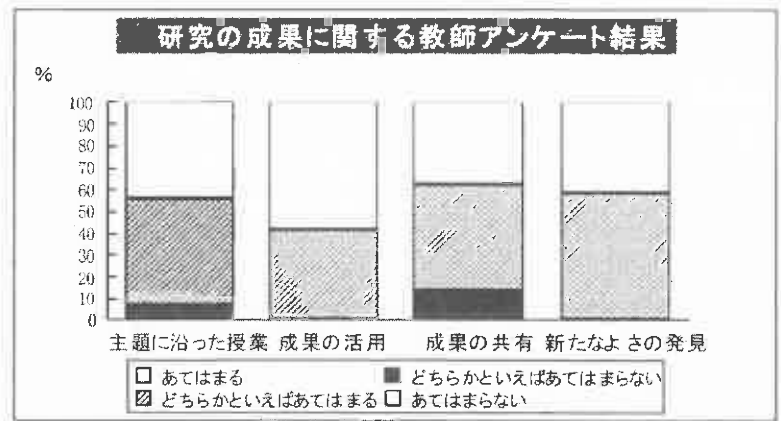
(2) 校内研修

月日(曜)	研修内容 ※研修形態	学校研究との関連
6月23日(月)	学校研究に関する研修① 積極的な生徒指導 ※ロールプレイング	研究の概要・計画等の共通理解 よさを活かして自己指導力を育成する
8月25日(月)	学校研究に関する研修② ※教科部会	指導法の検討と2学期の取組
11月20日(木)	道徳の授業の充実 ※グループワーク	考えを深め、意見を引き出す発問
1月19日(月)	学校研究に関する研修③	研究成果の検証と課題の明確化
2月16日(月)	学校研究に関する研修④	今年度の研究のまとめ
3月20日(金)	学校研究に関する研修⑤ ※講演	生徒のよさを活かす教育活動の推進

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 明確な視点のもとに、組織的に日常的な授業改善に取り組むことができた。
- ② 生徒のよさを活かし、伸ばすための授業の具体的な手立てを活用できた。各教科で工夫した指導法は、生徒がアンケートで「意欲が高まる授業」「好きな授業」と回答した内容と合致するものであり、教科を超えてすべての教師が共有していきたい。



ア 学習意欲を高め、生徒主体の授業にする手立て

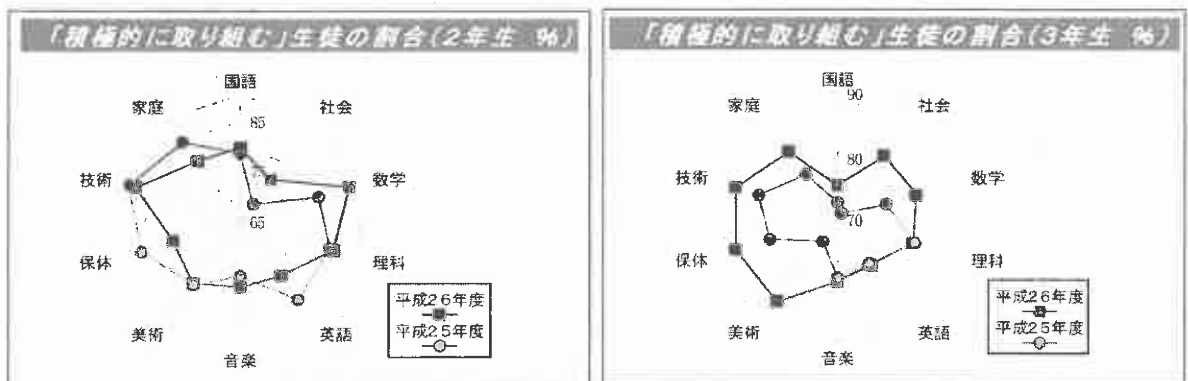
- 生徒の活動を取り入れる → 体験的・作業的な活動、技能を習得する活動、話し合い活動や発表など。役割分担も効果的。
- 多くの意見を出させる → 多面的・多角的な考察、比較や関連付け、お互いのよさの認め合い、自信を持たせるなど。導入やまとめの場面での活用。
- 生徒同士のかかわりを活かす → 意見交換、学び合い、相互評価など。
- 目標や主題を明確にし、学習に具体的なイメージや見通しを持たせる。
- 生徒の実生活と学習内容に結び付きを持たせる。

イ 表現力、コミュニケーション能力等をさらに伸ばす手立て

- 言語活動の充実 → 自分の思いを言葉や文字で表現する活動、伝え合う活動、まとめや振り返りを文章で書く活動、など。

ウ 小学校の学習や他教科の学習との連携 → 話し合いの仕方や実験など。

- ③ 昨年度と比較し、授業に対する積極性が高まった。



昨年度同時期と比較すると、2・3年生は、授業の取組が「積極的である」「どちらかといえば積極的である」とアンケートで回答した生徒の割合が増えた。1年生についても、全教科において約80%の生徒が積極的に取り組んでいるという回答結果を得た。また、今年度の「川越市の児童生徒の学習・生活状況調査」の「調査C」でも、90%以上の3年生が、「発表の機会を与えられている」、「話し合う活動をよく行っていた」、話し合いを通して「自分の考えを深めたり、広げ」ることができたと回答した。この結果からも、本研究が着実に成果を挙げているといえる。

(2) 来年度に向けての課題

- ① 指導力向上のため、教職員が学び合い、教え合う取組をさらに充実する。
 - ② わかる授業の実現に向けた、効果的で具体的な指導法をさらに開発する。
 - ③ 新たな生徒のよさを発見し、伸ばそうとする継続的な取組を確立する。
- 以上のような課題の解決を図り、来年度は、研究の成果を授業以外の諸活動にも広げて、生徒が「よさ」をさらに発揮できる学校をめざしたい。

研究主題

「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」 ～実感を伴った理解を深める理科指導の工夫～

川越市立中央小学校

研究のポイント

—実感を伴った理解を深める—

- ・目的意識をもった観察や実験、科学的な体験、自然体験などの具体的な活動を多く取り入れることで、自然の事物・現象に対する楽しさを味わうことのできる児童の育成に取り組む。
- ・単元や授業の導入を工夫し、多様な学習形態を取り入れることで、自ら問題を見だし、解決しようとする児童を育成する。
- ・生活と結びついた授業展開をしていくことで、実生活とのつながりを意識できる児童を育成する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

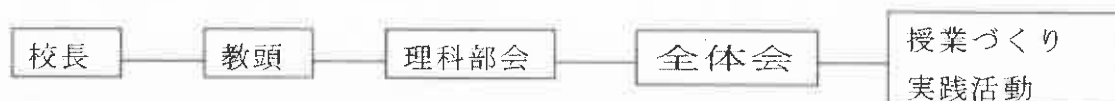
「実感を伴った理解を深める」ことを研究の大きなねらいとしている。

本校は平成24年度より2年間にわたって、学校課題研究として理科・生活科・生活単元の研究に取り組んできた。授業実践や環境整備等を通して一定の成果をあげることができ、研究としての区切りをつけた。しかし、次の(2)に記した本校の実態から、今後も継続的に自然の事物・現象に対して興味・関心をもたせるようにし、実感を伴った理解を深めていけるような授業改善を図っていく必要があると考える。

(2) 研究主題設定理由

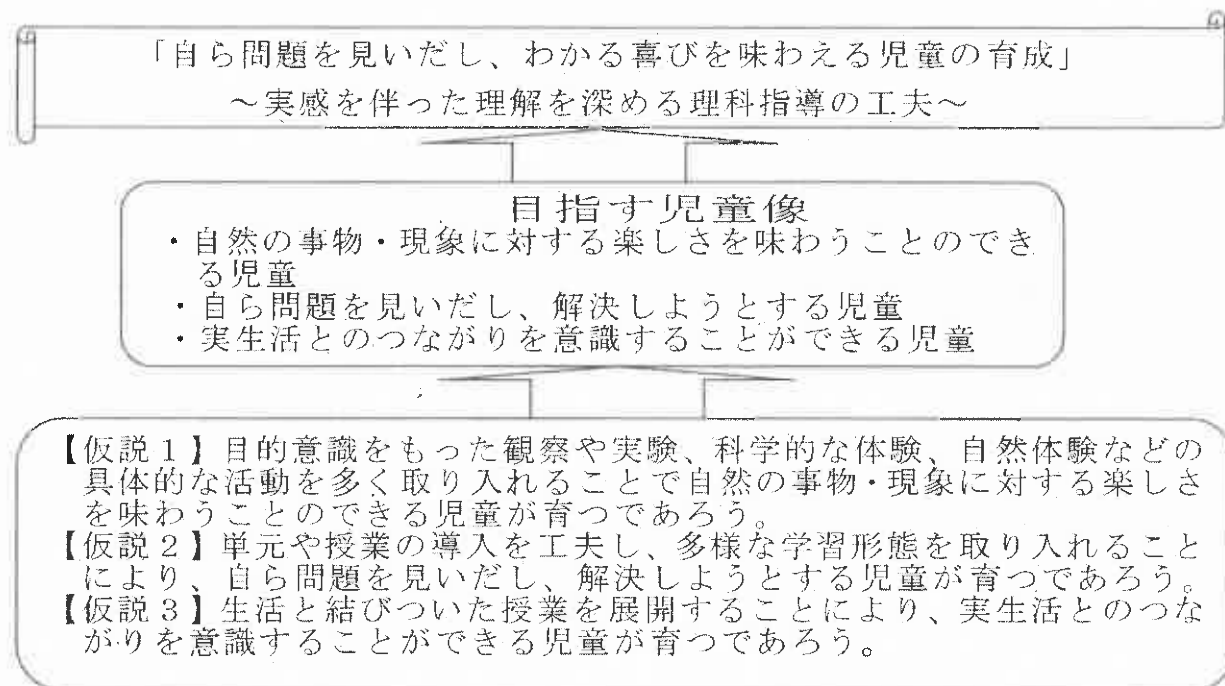
本校は、市街地に立地しており、日々の生活の中で自然に触れる機会が少なく、体験等を通して実感を伴った理解を深めることが難しい。また、昨年度実施したアンケート調査から、動物や虫が苦手という児童は2割にのぼる。さらに、標準学力検査の理科の結果においては、学校課題研究を終えた今年度においても、他の教科に比べ、学力が低い傾向にある。そこで、昨年度まで学校課題研究として取り組んできた研究主題および副題をそのまま指定学校研究においても継承して、児童の自然科学に対する興味・関心を高めるような体験的な学習を取り入れた指導や環境整備をより一層進めていく。そして、実感を伴った理解を深め、わかる喜びを味わえる児童をさらに育成していきたい。

(3) 研究組織



2 研究の内容

研究の主な手立て



【仮説1】 についての手立て

- ・観察や実験、栽培、飼育、ものづくりなど、児童が具体的に活動できる場を確保する。
- ・一人一実験を推奨し、児童が積極的に活動できるよう、観察や実験時にはできるだけ多くの実験器具や具体物、視覚支援教具を準備する。
- ・仮説を設定し、児童が主体的に実験方法を計画する学習を展開する。

【仮説2】 についての手立て

- ・単元及び本時の導入時に、半知半解なものを与えるなど、児童が知り得る知識と、経験とのズレを感じさせるような事象提示を行う。
- ・思考の外化を促すために、予想・考察で用いる文型を作成する。
- ・ペアやグループでの活動を積極的に取り入れ、学習に変化をつける。

【仮説3】 についての手立て

- ・児童の興味・関心を高めていくことができるような環境整備を進める。
- ・観察や実験時には、実生活との結びつきを意識させていくために、身近な素材を取り上げるようにする。

3 実践事例

(1) 授業実践における取組

① 単元導入時における工夫

理科主任が年度当初に単元導入時の授業展開の工夫について授業公開を行い、本校における理科の授業の進め方についての共通理解を図った。



② 理科実験助手との連携

「NPO 法人子ども大学かわごえ」からの支援を受け、本校独自に理科実験助手を採用している。週2回、高学年の理科の授業を中心に、実験器具の準備や授業におけるサポートなど、担任と連携を取りながら授業を展開している。特に実験や観察等においてはきめ細かい指導を行うことで、一人一人の具体的な活動の場を確保している。



③ 公開授業の実施

理科主任を中心に、10月までに4回の公開授業を実施した。初任者研修や教育実習における示範授業に合わせて略案を作成し、導入や学習形態を工夫した授業を展開した。

(2) 環境整備における取組

① 理科室の環境整備

充実した授業を展開するために、夏季休業中を中心に理科室の環境を整えた。分野別に実験器具をそろえるとともに、表示を大きくわかりやすいものにして、児童が進んで準備や片付けができるようにした。



② 樹木プレートの修繕

一昨年度、校内にある樹木30種類以上に、クイズ形式の樹木プレートを付けた。2年が経過し、取付用の紐が切れたものや、プレートが傷んだものが増えてきたことから、全職員で補修にあたった。

③ 理科備品・消耗品の充実

理科教育等設備整備の国庫補助および東京海上日動教育振興基金の助成を受け、理科室専用のプロジェクターやデジタル顕微鏡、堆積岩セット等を購入し、できる限り具体物を見たり触れたりできるようにした。

(3) 行事等における取組

① わくわく科学教室の実施

文部科学省からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定されている県立川越女子高等学校からの協力を得て、夏休みに「わくわく科学教室」を実施した。当日は92名の児童が参加し、分野ごとに4つの教室に分かれ、ローテーションをしながら科学体験を楽しんだ。

第1ブース（化学）…再結晶 色が変わる実験

第2ブース（地学）…化石レプリカ 大気圧実験



第3ブース（生物）…ダンゴムシの性質
葉脈標本

第4ブース（物理）…科学工作（錯覚おもちゃ
紙ホイッスルづくり）

② クラブ交流会の実施

本校では、学習活動の活性化と児童の学習意欲を高めることを目的として、県立川越女子高等学校の生徒約60名を迎え入れている。その交流事業の一環として、クラブ活動の時間においても交流をしている。「わくわく科学教室」とは異なり、生徒が主体となって児童の自然科学に対する興味・関心を高めるような活動を行っている。



③ 学級園の積極的な活用

自然を身近に感じることができるよう、学級園を整備し、積極的に活用していくようにした。理科や生活科の授業で使用する植物だけでなく、家庭科など他教科との関連も図りながら野菜作り等も行うようにした。



④ 理科朝会の実施

児童の理科への興味・関心を高めるため、理科朝会を実施した。全校児童を前にして、科学教育振興展覧会に出品した作品を紹介したり、川越市小学生科学体験事業に参加した児童から活動報告を行ったりした。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 目的意識をもった観察や実験、科学的な体験などの具体的な活動を取り入れたことで、児童の興味・関心をさらに高めることができた。
- 「わくわく科学教室」など、県立川越女子高等学校との連携を図ることで、児童のみならず教員の自然科学に対する興味を高め、授業の充実につなげることができた。
- 環境整備を進めていくことで、身近な自然に主体的に関わるようになった。

(2) 課題

- 今後も近隣の大学や高校との連携を図り、児童の興味・関心を喚起していくような取組を実施していきたい。

研究主題

「規律ある態度を育成し、学力向上を図る教科指導と学級経営に関する研究」

川越市立古谷小学校

— 研究のポイント —

- ・ 第5学年児童については、本来2学級編制である当該学年を3学級編制とし、きめ細かな指導を実施することで、学級経営の充実を目指す。
- ・ 担任と連携した算数科少人数指導と生徒指導の実施により、学力の向上と生徒指導の充実を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 第5学年児童の算数科の学級コース別指導を通して、個に応じた指導を要する児童の学習規律の定着と学力向上を図る。
- ② 第6学年児童の算数科の学年コース別指導を通して、学習の達成状況に合わせた指導で、学力向上を図る。
- ③ 第5学年、第6学年児童の担任と連携した生徒指導の充実を図る。

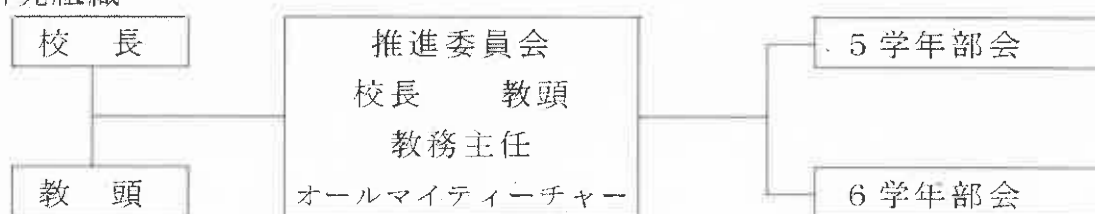
(2) 研究主題設定理由

昨年度、第4学年の在籍児童数は80名だったため、40人ずつの2学級編制で1学期がスタートした。本学年は、生徒指導上、課題を抱えた児童が複数在籍していたこともあり、1学級で6月頃から担任の指導が通らない状況が見受けられるようになった。そこで、学級が上手く機能しない状況に係る臨時講師を県教育委員会に要請し、当該学級の改善を図った。

また、第5学年も第4学年と同様、生徒指導上の課題を抱えた児童が複数在籍しており、低学年の頃から、学級がうまく機能しない状況に陥っていた。そのため、校内で担任以外の教員が交替でクラスに入り、指導を続けてきた。

このような状況から、本年度は、オールマイティーチャーターの制度により、第5学年については、学級を3クラス編成とし、1クラスの在籍数を少なくして、規律ある態度の育成を図り、合わせて算数の少人数指導を実施することにより、学力向上を図った。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 第5学年児童の算数科の学級コース別指導を通して、個に応じた指導を要する児童の学習規律の定着と学力向上を図る。

- (2) 第6学年児童の算数科の学年コース別指導を通して、学習の達成状況に合わせた指導で、学力向上を図る。
- (3) 第5学年、第6学年児童の担任と連携した生徒指導の充実を図る。

3 実践事例

第5学年2組 算数科学習指導案

平成26年10月1日(水)第3校時 算数学習室

じっくりコース 児童数 男子6名

授業者 蓬萊 孝子

1 単元名 単位量あたりの大きさ (2)単位量あたりの大きさ

2 単元について

(1) 題材や教材観

本単元では、「いくつかの数量があるとき、それらを同じ大きさの数量にならす」という平均の意味とその求め方、および平均の考えを前提として単位量あたりの大きさについて理解し、用いることができるようにすることをねらいとしている。

平均では、個体差のあるものをならしてどの大きさも同じと考え、また分離量でも平均で考えるときには小数で表してもよいことなどを指導していく。このならすという平均の考えを前提として、第2小単元において単位量あたりの大きさについて学習する。

(2) 児童観

本学級は、算数に積極的に取り組む児童が多いが、自信のなさから日ごろの学習活動に積極的に取り組めない児童もいる。本単元で個に応じたコース別学習を行い、集中して取り組めば学習は理解できるという体験をさせたい。そのために、努力したこと、できたことは機を捉えて称賛する必要がある。

(3) 指導観

じっくりコースでは体験的活動、作業的活動を多く取り入れて、目で見させ、触らせ、動かして、平均や単位量あたりの大きさを指導していく。そのことから、無理なく論理的に考える姿勢を培っていきたい。

本単元の平均や単位量あたりの概念や数量の関係は教科書の中だけではなかなかつかみにくい。そこで、日常的に使う場面を豊富に用意し、それらを題材にしなが数量の関係や数の処理の仕方を捉えさせる工夫をしていく。

3 単元の目標

- ・平均の意味を理解し、それを用いることができる。
- ・異種の2量の割合としてとらえられる数量について、比べることの意味や比べ方、表し方を理解し、それを用いることができる。

4 指導計画(15時間扱い)

- (1)平均 6時間
- (2)単用量あたりの大きさ 6時間・・・本時 7/15
- (3)まとめ 3時間

5 本時の学習指導 (7/15時)

(1) 本時の目標

- ・面積、匹数が異なる場合の混み具合の比べ方を理解し、比べることができる。

(2) 本時の評価規準

- ・混み具合は2量の割合としてとらえられる量であることに気付き、面積、匹数が異なる場合の混み具合の比べ方を考えようとしている。

【関心・意欲・態度】

(3) 展開

学習活動	主な発問(○)と予想される児童の反応(・)	指導上の留意点(・)支援(☆)評価(□)
※3つの場面について、混んでいるのはどちらか話し合う。	○2つのうち、どちらがこんでいますか。 ・ばらければ、同じ。 ・人数が10人でプールが広いからウ ・体育館の面積が同じで人数がとっても多いからオ	・児童がますの中に入って混み具合を体験する。 ・「こんでいる、すいている、かたまっている、ばらけている」ということの意味や経験について話し合う。
1 問題を知る。		
2 課題をとらえる。		A, B, Cのうさぎ小屋のこんでいる順序を調べましょう。
3 見通しを立てる。		こみぐあいの比べ方を考えよう。
3 見通しを立てる。	○混み具合を比べるには、何と何がわかればよいですか。 ・うさぎ小屋の面積とうさぎの数。 ○AとBのうさぎ小屋では、どちらがこんでいますか。 ・9匹と8匹だからAのほうが。 ・面積が同じで、匹数が多いからA。 ○BとCのうさぎ小屋では、どちらがこんでいますか。	・課題をノートに書かせ、本時の課題をとらえさせる。 ☆うさぎ小屋を表すシートにうさぎ(シール)を貼って考える。 ・ます1つは、1㎡であることを確認させる。 ・かたまらずに、ばらけるように貼らせる。

4 自力解決をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6 m²と 5 m²だから B のほう。 ・ 匹数が同じで、広いから B。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ C の小屋は長方形にするため 1 ますを 2 つに切り分けていることに気付かせる。
5 考えを発表し、よさを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 面積もうさぎの数もちがう A と C ではどちらがこんでいますか。 ・ C1—面積を 6 と 5 の公倍数の 30 にそろえて考える。 ・ C2—1 m²のうさぎの数でくらべる。 ・ C3—1 ぴきあたりの面積で比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ます 1 つは、1 m²であることを確認させる。 ・ ならして 1 m²の平均の人数にすることに気付かせる。 ・ もう 1 つのならし方(平均)はないか声掛けする。 □ 面積、匹数が異なる場合の混み具合の比べ方を考えようとしている。
6 学習のまとめをする。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">面積かうさぎの数を同じにするとこみぐあい比べられる。</div>	
7 次の予告を聞く。		

4 研究の成果と課題

- 算数科の学習を楽しみにしている児童が増えた。授業中の質問が増え、活気のある授業が展開されるようになってきた。発展的な学習に自ら取り組む児童が多くなってきた。
- 算数科以外の学習にも落ち着いた態度で授業に取り組んでいる。
- 授業規律が守られ、静かに学習する態度が定着しつつある。私語や忘れ物も減少しつつある。
- 算数の得意でない児童も、きめ細かな指導・声かけの結果、授業に前向きに取り組むようになり、少人数指導担当教諭に自分から質問をして問題を解こうとする姿が見られる。
- 学級での学習や少人数指導教室での授業規律が確立してきた。
- 6 学年では、落ち着いた授業が全ての学級で展開されている。5 学年は、1 クラス落ち着いた児童が多い学級があり、オールマイティーティーチャーを活用した指導体制を取り、学校全体で指導を行っている。
- 第 5 学年の算数テスト 2 学期の平均得点は、70.14 点で、分数と小数の関係が難しかったため、平均点がやや下がったが、それ以外の単元では、1 学期と比べて良い結果が出ている。
- 第 6 学年の算数テスト 2 学期の平均得点は、73.31 点で、1 学期の 71.7 点よりも良くなっている。

研究主題

「観察・実験等を通して、科学の好きな児童を育てる理科学習」

川越市立高階南小学校

研究のポイント(オールマイティーチャ어의活用)

- ・第3・4・5・6学年の授業でTTを実施する。
- ・理科の観察・実験を中心とした授業において、児童の指導の補助にあたる。
- ・クラブ活動における科学クラブの担当として、実験を中心に児童の指導にあたる。

1 研究の概要

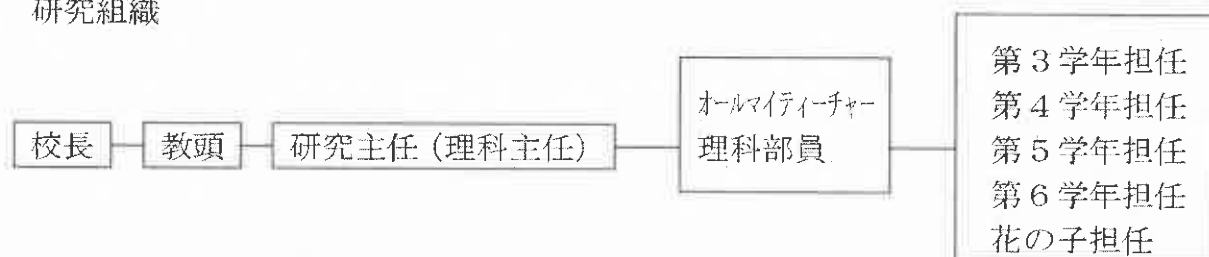
(1) 研究のねらい

- ① 観察・実験等を通して、科学の好きな児童を育てる。
- ② TTによる授業を通して、科学の好きな児童を育てる。
- ③ 児童の興味・関心に応じた実験を行い、科学の好きな児童を育てる。

(2) 研究主題設定理由

平成25年度の教研式標準学力検査NRTによると、本校では、「観察・実験の技能」に課題があった。また、アンケートによる実態調査では、理科の授業そのものや、理科の授業における「実験・観察」「予想・分析」を「好き・どちらかといえば好き」と答える児童の数値は必ずしも高いものとは言えない状況であった。そこで、授業における「観察・実験」の時間を確保し、充実した学習活動を行うことで児童の「自然事象への関心・意欲・態度」を育てようと考えた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 観察・実験等を通して、科学の好きな児童を育てる。

- ① グループ別実験の充実
- ② 一人一実験の実施
- ③ 予想と結果の考察

(2) TTによる授業を通して、科学の好きな児童を育てる。

- ① TTによるきめ細やかな指導の実施
- ② 自分の予想・考察をノート・プリントに記入させる能動的な授業の実施
- ③ 豊富な実験器具の活用による授業内容の充実・深化

(3) 児童の興味・関心に応じた実験を行い、科学の好きな児童を育てる。

- ① 科学クラブの実験の充実
- ② 夏季休業中の自主的実験の充実
- ③ 休み時間・昼休みの質問タイムの設定



光合成の実験

3 実践事例

(1) 指導対象 本校科学クラブ

- (2) 研究主題 「暑い夏、エコカーテンで涼しく」
 (3) 研究の動機

現在、地球上では温暖化が問題となっている。夏は特に気温の高い日が続き、エアコンなしで生活することは難しい。そのような中、緑のカーテンを学校、家庭などいろいろなところで見かける。高階南小学校でもゴーヤ・ヘチマ・アサガオなど使って、緑のカーテンに取り組んでいる。この緑のカーテンで涼しくなるのだろうか。また、涼しくなるとしたら、どのくらい効果があるのか。



そこで、高階南小学校科学クラブでは、緑のカーテンを作り、その涼しさについて調べた。また、普通教室のカーテン、よしずのカーテン、観察・実験の結果から自分たちで考えたタオルのカーテンなどの効果についても検証した。

(4) 研究の目的

- ① ベランダでゴーヤのカーテンを育て、ゴーヤのカーテンを作る。(比べるため2教室) ゴーヤのカーテンの涼しさを、ベランダ、教室、廊下で調べる。(条件を同じにするため、廊下の窓はしめる)
- ② ゴーヤのカーテンとよしずのカーテン、教室のカーテン、タオルのカーテンの涼しさを比べる。
- ③ 緑のカーテンは、日かげで涼しいのか、葉からの蒸散で涼しいのか調べる。
- ④ 観察実験の結果を生かし、自分たちで、エコカーテンを作り、その涼しさの効果調べる。

ゴーヤのカーテンがあるベランダ



(ゴーヤのカーテン)

(5) 研究方法

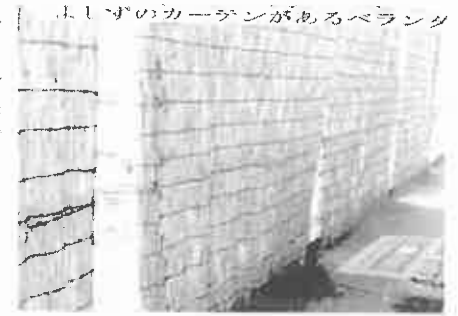
① ゴーヤのカーテン

- ア 4階の1教室のベランダに大きめのプランター(たて36cm、横96cm、深さ27cm)を6個並べる。この実験では、2教室(5年1組、5年2組)に置いた。(4階の教室にした理由は1階の地面に植えたゴーヤは、3階から4階までこないと、他の教室と比べながら実験ができること、また、4階の教室は暑く、1階と比べて2~3度高いことが調査の結果分かった)
- イ プランターは、ベランダの手すり側にたてに並べ、プランターの下には、太いまくら木をひいた。(プランターの水はけをよくするため)
- ウ 1つのプランターにばいよう土(20キログラムを1ふくろ半)を入れ、2個のゴーヤの苗を植えた。この実験では6月のはじめに植えたが、ゴーヤの育ちと効果を考えると、遅い。また、固形の化学肥料を、1つのプランターに100グラムを与えた。
- エ 屋上から4階の手すりまで、ゴーヤのつるが伸びていくための網をかけた。
- オ 毎日水やりを行い、2週に1回肥料を与え土が少なくなったら土を追加する。
- カ 6月のはじめに植えたゴーヤに、十分な水と肥料を与えたところ、10月に入っても元気に育った。

② よしずのカーテン

- ア 昔から日本で使われているよしずのカーテンを使い、温度を測定した。

イ ベランダの手すりに、ロープでよしずを垂直に取り付ける。(1教室分の大きさ、たて2.7m 横7.3m) 垂直に取り付けた理由は、よしずはななめに立てかけて使われているが、空気の流れが悪く、この実験では温度が上がったため。



(よしずのカーテン)

③ タオルのカーテン

ア 家にある使い古しのタオルを利用し、カーテンを作り水をかけることにした。

イ 使い古したタオルを約60枚用意する。

ウ ツルをまく植物栽培用の網を4階のベランダの手すりから屋上に張った。(また緑のカーテンの網も使うこともでき簡単)

エ タオルとタオルの間を約5cmずつ離しながら、タオルの4つのすみをせんたくばさみではさみタオルを網にはる。(理由は空気の流れを良くするため)

オ 実験を進める中でタオルはかわきが速く、涼しくなる効果が長く続かないことがわかった。そこで今までのカーテンの上にバスタオルを張りカーテンを厚くした。バスタオルは風通しを考え上の部分の2つの部分をせんたくばさみで網に張った。



(タオルのカーテン)

カ タオルのカーテンはせんたくばさみで網に張ったが2つの台風に飛ばされることもなくじょうぶなことがわかった。

キ このタオルのカーテンは、タオルに水を十分含ませて気温を測定した。

④ 普通教室のカーテン

普通教室のカーテンをすべて引いたままにし、それぞれの場所の気温を測定した。

⑤ 比較するための教室

ゴーヤのカーテンがベランダにある教室、タオルのカーテンがある教室、よしずのカーテンがある教室、普通教室でカーテンを引いた教室と比べるために、カーテンのない教室を準備し、同じように測定した。

(6) 結果 (それぞれのカーテンの特徴)

① 普通教室のカーテンは、太陽の光をさえぎるが、熱がこもりがちで、逆に温度が上がりがちであった。

② よしずのカーテンは、大きく温度は下がらないが、風をさえぎり安定した温度を保っていた。

③ ゴーヤのカーテンは大きく温度が下がり、安定していた。

④ タオルのカーテンは、水でぬらすとゴーヤのカーテンの温度近くまで、温度が下がった。

(7) わかったこと

① ゴーヤのカーテンについて

ア 暑さに対してのゴーヤのカーテンの強さ、涼しさの効果がわかった。ゴーヤのカーテンの温度は、気温と比べて低いが、温度変化は同じであった。しかし、温度差は小さく安定している。このことは、ゴーヤが生きていくために、自分の体温を下げるはたらきをしているのではないかと考えられる。

イ 緑のカーテンが涼しいのは、緑のカーテンの日かげができるからではないかと考えられている。実験していく中で、蒸散が関係しているのではないかと考えた。そこで、モデル実験として、かわいたタオルのカーテンの日かげの温度と、ぬれたタオルのカーテンの中の温度を比べることにした。その結果、日かげと蒸発の両方の影響を受けていて、蒸散の方がより影響が大きいことがわかった。ゴーヤに水をかけると、大きく温度が下がることからいえる。

② タオルのカーテンについて

ゴーヤのカーテンと比べると、わずかに温度が高い。タオルに変えてバスタオルにしたところ、カーテンの効果が大きく長くなった。緑のカーテンを育てることを考えると、必要な時に水をかけるだけですむタオルのカーテンは、使いやすく利用できるのではないかと思う。

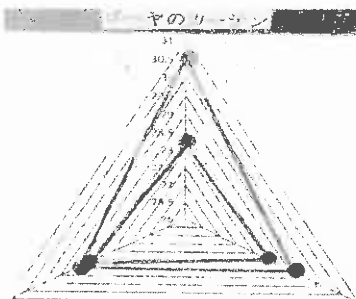


③ よしずのカーテンについて (ゴーヤのカーテンと他のカーテン比較)

よしずのカーテンは水を含むことによって、一時的に大きく温度は下がるが、よしずが含むことができる水分は少ないために、蒸発が速く低い温度を持続することはむずかしい。今後、水分をどのように含ませるか工夫したい。

④ 観察・実験から涼しいエコカーテンの条件として、次の条件が考えられる。

- ア カーテンの風通しがよいこと。
- イ カーテンで日かげができること。
- ウ カーテンは水を含み、蒸発を続けていること。
- エ カーテンによる涼しさが一定時間継続していること。



【授業等の指導の様子】

(ゴーヤのカーテンがある時とない時の気温の差)



TTによる指導



質問タイムの設定



科学クラブの指導

4 成果と課題

- 観察・実験の充実が図られ、理科の授業に活気が生まれた。児童は、理科学習の本質的な「おもしろさ」を実感し、実験に一層意欲的に取り組むようになった。
- アンケート結果(現6年生) 【好き、どちらかといえば好き】(H26.3 → H26.12)
「実験をしたり、観察をしたりすること」 82.5% → 91.9%
「予想を立てたり、結果からわかったことを考えたりすること」 49.1% → 62.1%
- 理科の授業、特に実験を行う際に、オールマイティーチャーに大きく頼ることがしばしば見られた。結果的に、授業の展開や実験器具の準備・保管等に、教師としての力量を身に付ける機会を逸してしまう恐れがある。教員相互に指導力を高めていける環境作りが必要である。

研究主題

「CST事業を活用した小中連携による魅力ある理科授業の創造」

川越市立大東中学校

研究のポイント

中学校理科教員が小学校の授業に参加し、より専門的な指導方法により理科授業の充実を図り、児童の理科に対する興味・関心を高める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 理科に対する児童の興味・関心を高める。
- ② 児童の基礎・基本の定着を図る。
- ③ 9年間を見通し、理科の授業における小中のスムーズな連結を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校の理科における指導目標は、「生徒が日常生活や自然体験を通して、知的好奇心や探究心をもち、目的意識をもった観察・実験を行うことにより、問題解決の能力、科学的な見方や考え方ができる生徒を育成する。」ことにある。そのためには、その基盤となる小学校との連携を図り、見通しをもって推進していくことが大切である。以上の理由で主題設定をした。

(3) 研究組織

S J 担当

大東中学校理科部教諭

※S J = スクーリング・ジョイント

武蔵野小学校 6 年生担当教諭

大塚小学校 6 年生担当教諭

大東東小学校 6 年生担当教諭

2 研究の内容

(1) 小学生に対する意識調査 (3校の集計)

① 理科の勉強は好きですか。			
好き	どちらかという 好き	どちらかという 嫌い	嫌い
49%	38%	11%	2%
② 実験をすることは好きですか。			
好き		ふつう	嫌い
80%		16%	4%
③ 観察をすることは好きですか。			
好き		ふつう	嫌い
42%		46%	12%
④ 生き物や植物を育てることは好きですか。			
好き		ふつう	嫌い
56%		32%	12%
⑤ ものづくりをすることは好きですか。			
好き		ふつう	嫌い
56%		35%	9%

以上の意識調査から、総じて児童は理科に対する興味・関心が高いので、より専門的な指導方法による授業が効果的であると考えられる。

(2) ティーム・ティーチングによる授業

原則として週1回、各小学校に理科担当教諭が訪問し、担当教師とTTの形態で理科の授業（主に実験）を行う。

(3) 研究計画

期日	事業内容	場所	対象
1年間を通して、大東中学校区内の小学校を中学校理科教諭が週1回訪問し、理科の授業を支援する。			
5月	単元名「ものが燃えるとき」	小学校 理科室	6年生
6月	単元名「植物のつくりとはたらき」		
7月	単元名「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」		
9月	単元名「水よう液の性質」		
10月	単元名「月と太陽」		
11月	単元名「大地のつくりと変化」		
1月	単元名「てこの規則性」		
2月	単元名「発電と電気の利用」		
3月	中学校に向けての特別授業		

3 実践事例

(1) 期 日：平成27年1月27日（火）

会 場：武蔵野小学校理科室

児 童：6年2組

指導案『手回し発電機を使って作った電気を利用しよう』

過程	授業の内容・流れ	学習のねらい	留意点
導 入	<p>【復習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 乾電池のつなぎ方の違いによる。 豆電球のつきかたの違いを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 電圧が大きいほど明るいことを確認し、次の展開の布石とする。 	
	<p>【実験1】</p> <ul style="list-style-type: none"> 手回しの発電機を時計回りにゆっくり回し、豆電球・モーター・ブザー・LEDを作動させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験2, 3の基準となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各班で結果がそろえるよう指示をし

展



【実験2】

- 手回し発電機を反時計回りにゆっくり回し、豆電球・モーター・ブザー・LED を作動をさせる。
- 実験1と比較する。

開



【実験3】

- 手回し発電機を時計回りに速く回し、豆電球・モーター・ブザー・LED を作動させる。
- 実験1と比較する。

- 極性を持つものがあることを気付かせる。

- 速く回しすぎないように指示する。
- LED やオルゴールの極性を指導する。
- LED は電圧が上がらないと発光しない。(回し方によってつく班とつかない班がある)

- 導入と関係づけて、電圧が上がっていることに気付かせたい。

- つく、つかないだけでなく、音量や高低、回転の向きや速さを記録するように指示する。

まとめ

- 手回し発電機を回すと電流が発生すること。
- 逆に回すと電流が逆向きになっていること。
- 速く回すと電圧が高くなっていること。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

○ TTによるきめ細かな指導と支援

観察・実験をTTで役割分担をすることによって、机間指導で観察の視点を与える言葉がけをしたり、グループでの評価を尋ねたりするなどきめ細かい指導やつまづいている児童への支援ができた。

○ 問題解決学習の流れを各学校で統一

問題解決学習の流れを3校の小学校で統一して行うことができた。学習の流れを定着させるために、“課題→予想→方法（計画）→結果→考察→まとめ”という過程がわかる板書にそろえた。また、ノート指導についても小学校の先生に協力してもらい、問題解決学習の流れがわかる工夫ができた。

○ 児童の意識

問題解決学習が定着してきたことで、見通しをもって観察・実験に取り組む児童が増えた。また、理科の学習が「生活に役立つ」「身近なこと」として捉える児童が増えた。

○ 教員の意識

中学校の教員にとっては、児童の学習の様子やスキル習得の様子が分かり、中学校に進学した際、見通しをもって指導していくことができる。逆に、小学校の教員にとっては、中学校で求められる力を知ってもらい、意識して指導にあたることができた。

(2) 課題

○ 小・中学校教員同士の連携

学期始めや単元始めなどに小・中教員で学習計画の打合せができたが、毎時間の指導内容について細かい打合せができなかった。時間設定の工夫が必要である。さらに、授業後にお互いの感想や課題を持ちより、検討する時間を十分に確保できれば、一層連携が図れる。

○ 理科学習の改善と理科学習環境の整備

小学校により理科学習の環境（設備・備品など）に違いがあり、授業を展開する上で困惑した場面があった。事前に小・中教員の情報交換など連携を密にする必要がある。また、同一地区内の小学校と中学校が連携して一貫した学習計画を作成し、共通理解を図っていくことも大切である。

○ 児童の意識の定着化

課題に対して目的意識を持って活動するように、単元の導入を工夫し、自ら問題を解決しようとする意識の定着を一層図っていくことが大切である。